



大正十三年四月二十八日發行 第七十六號

学友会報

神戸高等商業學校學友會

目次

○題詩	平凡な私の感想	大槻 勳
○研究	精神力について	三輪嘉一郎
○隨筆	脚燈漫語 (二)	齋美多美登利
○詩歌	桃花その他	連木 行三
	小 曲	爲房 眞色
		ひさし
○部 報	理事會	陸上運動部
	弓術部	講演部
		水泳部
○雜 報	廣告研究會	劇研究會
		丘上短歌會
○學校記事	常議員會開催	津田 恂三
	淺井徳太郎君を想ふ	山本 明
	不羨閑語	
	シドニー支部	神戸一九二三會
		三回生會
		東京一九二〇會
		大阪一九二三會
		京濱十一期會
		第十四期生會
○會員動靜		
○會費受領報告		
○編纂餘言		

題詩

親しみ呼び掛くる言葉

勇 二

友よ。うらゝけき春日の下
 緑草の上にすわりて、
 先づ大いなる息をせよ。
 伸びやかに自由の息を
 げに自由こそ、丘の誇りなれ。
 我が簡臺の上高く、嚴として聳ゆる文化の殿堂よ
 夕光來つてさす時は、ピンクの温光は白眞珠のなつかしき匂ひを發す。
 友よ。そを仰ぎ給へ。
 されど友よ、
 朝の澄空に波打つ、鐘のひびきに耳を澄ますことを忘れ給ふな。
 その眞摯なる心こそ、丘の生活の象徴なれ。
 友よ。自由と眞摯此の久遠のモットーの下に
 手をとりて進まう、
 手をとりて共に。

(一九二三、四、一七)



想 華

平凡な私の感想

大槻 勳

私は哲學も知らぬ。宗教も味へない。と言つて文學も擱めない。だが敢て哲學を探したり宗教を求めやうとはしない。唯淺い思索から割出された平凡な私の感想を時々會報に出すのだから本當に恥しい事である。今度も去年の八月に書いた感想文を掲載すると言はれたので今一度讀んで見たら本當に安つばいセンチメンタリストの感想である様に思へる。人間の全き純眞的要因にのみ支持された生活を無條件で讚美する單なる人生破壞者の夢である様な氣がしてならない。けれども又かゝも思つて見る。勿論生きる事は合理化された妥協や逡巡の生活の把持者になる事である以上、意識的に又無意識的に私は合理化生活を認して居る者であるから、單なる純眞的要因に支持されての耽溺的な非建設的な生活を今肯定する者でないけれども、合理化へのカーブは餘りに悲哀であり而も其の生活に生命の歡びの凱歌をあげる事が出来るとしてもそれは虚偽であり少くも安價である様に思へるので矢張りセンチメンタルな想ひでも今讀んで見て可なり其の思想に愛慕の念を湧かざるを得ないのである。或意味に於ける生活破壞者の極く平凡な感想であるけれども。

執拗な思索的生活は矢張り私の生命である。
 寂しい瞳に沈痛な涙を滲ませながらジツと想ひに耽つて暗闇な、だが力強い生命の歩みに深い歡びと感謝を捧げる。哀憐の涙を通して此の懺悔たゞしい現實を凝視して見る。澤山の悔める魂が泣きわめいて居て矢張り現實は暗闇にしか見えなけれども此の暗闇に又限りない愛着の心が湧いて來る様に思へる。人間生活のごよめきの聲が何となく懐しくてたまらぬ。
 たゞへ悲哀や煩悶や所謂澤山の否定された人間苦惱が蟻つて居てもそれに對して私は心ゆくばかり感謝の涙を捧げて獨りすゝり泣いて居たい。人間に對して私の聖化され淨化された所の愛着の情緒の中へ投げ入れられる時私は生が躍動して居るのか狂死して居るのかそれさへ意識が出来ぬ程である。
 私の想ひは餘りに夢幻的である事を想つて見ないでもない。然しながら内面の純眞性が吐き出す神祕的な光輝と法悦とに限りなく執着の心が湧いて來る。人生旅行の幾多の友は何故今少し人間的な生命の醗酵する感激を探求しないのだらうか。感激のない人にさつては人生はナツシクである。暗黒な苦惱の中にあつても私は大きな感激の輝光を掲げる事によつてのみ環境の總てをヒューマン化する事が出来又ジャステイフカイする事も出来る。周囲がより輝かしい意識と價値に充滿されて來るのも感激の光明が擴充される爲でなくして何であらうぞ。人間の理想的生活は飽くまで心靈意識の健全なる發達であらねばならぬ。
 「最も多く人生を感じた人のみ最も永く生存した人だと言へる」と誰かと言つて居る。感激のない生活は人生の沈滞である。丁度泥沼の死んだ水の、ばうぶらが湧いて枯れ葉は腐つて行くに任せるより外もない様

に。眞當なる生命を味ひ此の歡びの謳歌者であり人生の勝利者は靜かなる人生の感激家であらねばならぬ。人生否定——之こそ私達を魅する一つの強い力を持つて居る。然し生命に感激した生活統一者は決して生命の否定の魔力と阿諛に踏込むべき一寸の餘地さへ與へない。
 人間社會に渦巻く膨大なあの書物が果して私達の生きる事の綱となつてくれるだらうか。人は熱烈な愛の宗教を道慕したり輝く力の哲學を探求したりする。而してベルグソンもオイケンもターゴールもメーテリシクも之を愛する私等の心持は唯批評と共鳴と暗示との外には出る事もない。眞に人生をいつかり、潮歩出來るだけの力強い肯定意識を把持せんと爲に悶える私は矢張り黙して感激の恍惚境を探求する事の必要なるを知るのである。そして其處に力強い靈の境を見出して沈潜せねばならぬ。其の境地にあつて人生意識が生んだ感激を得た時その感激を表現したい噴火山の様な衝動に驅られて初めて人生に對する力強い「イエス」の矢を放つ事が出来るであらう。
 生命の歡びを探求し得る勇氣の所有者は又生活の悲哀に對する純眞な愛感の持主である。眞に人生を凝視する力と魂の所有者の前には苦痛もなければ憎悪もない。無條件熱愛の激烈なる熱情に浸つて居る人生の闘士にさつては悪は又善であり醜も亦美である。感激は一切の生活諸相を抱擁する力の醗酵素である。あらゆるものがあるがまゝに肯定して其の肯定の強い熱と涙の窮極する所に人生の焦點を探求する人であらねばならぬ。
 感激は一切の矛盾相対の調和境を把持する事を意味する。大きく兩手を掲げて總てを抱擁したいものだ。生命の歡びに熱きつたる人生闘士の心の中へは所謂

否定された一切の生活諸相の悲哀がわけもなく滲け込んでゆくであらう。

生命に感激する心と同時に心に閃くのはもつと人間的に純真でありたい事である。真裸體となつてあの太陽の輝きの中に飛び入る様に赤裸々な心で私の一切の弱味や悲哀を曝け出してせめて周囲の環境の人々までもお互ひに相抱き合つて進みたい。もつと素直な人間本来の性質の持主にかへりたい。もつと私は執拗な眼を輝かせて人間の虚偽を底の底まで探求せねばならぬ。もつと人間の純真にかへる時總ては罪ではない。美しい少女と戯れる事も決して罪ではない。高らかに歌う事すら餘りにいぢけてよい事がある。何故もつと人間の生活諸相を熱愛しないのだからか。ルーソーは言ふ。「人は皆假面の生活をやつてゐるのだ。彼等は自分の内面を考へるべき事がないから自分自身が自分に他人である。自分がごんごんのかさ言ふ事は彼等には何の價値もなくたゞ／＼自分の表面生活、自分の假面だけで生活するのだ。」

生命の感激者は又孤獨を愛する。靜的生活の飛躍を慕ふ。そして觸るれば切ると様な鋭利な純粹な感受性でよく人生を意識する。而る後に初めて意識ある人生に對する肯定の叫びが發せられる。涙ぐましい人生意識のない生命肯定者は恰も牧者を失へる小羊の様に當てもなく迷ひ暗黒の中にあつて絶望と類聚と死を待つ安價な生命否定への行程の上立つて居るに過ぎない。靜觀默想の中より苦悶なる意識體驗を有する人は完全なる生活統一者であり調和者であらねばならぬ。人生に於て孤獨は絶對の權威である。

「人間悠久な運命の姿」をさながら見る事を得る熱情と生活の矛盾相を凝視するだけの勇氣とは心靈意識の嚴肅に擴充されたる人生の内的孤獨者にのみ與へら

れたる特權である。

トルストイが其の「人生論」の冒頭に引用した例の本車屋の話は私等の人生意識にインスピヤートする所が多い。人生に對する「Why」にのみ生きんとする人があつた。然し單なる「Why」は人生反抗者の夢である。精神病者の癡言でなくして何であらうぞ。安價な生命否定の陥穽に落ちんとする人生の不調和者であり又敗北者であらねばならぬ。人生の正面破壊にのみ價値を認めたる反抗闘的な且蹂躪的な目醒めによつて眞實の人生を意識せんとするのは嚴肅な人生調和への第一歩としてのみ僅かに價値と意義が認められるのみであるからである。

現實肯定の心は悲しくもあり淋しくもある。然しながら鋭利な「ホワイ」の鐵錐をのみ人生に投げ込んで生命の歡びにヒューアーな一滴の感謝の涙さへ流さぬ人は怯懦なる人生の破壊者である。澤山の火葬場が造られた。あの赤く輝くなつた煙突からは絶え間なく人間を焼く煙が上つて居る。單なる破壊反抗によつて眞實を求めて自らを焦燥と狼狽に陥れつゝある人々にまつては異様な暗示であらねばならぬ。永遠の地球の生命の中から僅かに與へられた五十年六十年の生命も其の日其の日に絶え間なく燃焼して想ひ出の煙となつて消えて行くのを想ふ時に私はみぬちより心細い氣が湧いて来るのである。一切の焦燥と狼狽から離脱して靜かに永遠の眠りにおちつゝあるあの幾千基の石碑が何等かを囁いて私等に暗示してゐる様でなからぬ。

生存を離れて生活する人間である以上すべての人は哲學者であらねばならぬ。これはチエスタトンの言つた所である。カントを知りリツケルを語るのが哲學者ではない。生活諸相の總てに對する人間的な愛感の中には

幾多の哲理が充満して居る。生活に對する感激的な凝視默考こそ哲學である。安價な生活意識乃至は人生肯定を嚴肅な態度なそれに進展せしめる苦悶的思索こそ眞の人生哲學であらねばならぬ。

私の心の中には何時も慌たしい波動がある。一切の病的な生活から離脱して、のちの意識又は生活意識を強め生活の調和と統一の的に執拗な瞳を輝かしながら生命の歡びの凱歌をあげんとする絶え間ない心靈の波動である。だから私は生命第一義を目標に進んで行く。之は破壊であり革命であるかも知れぬ。然し最も眞撃に純粹に生命を意識して自己表現の雄々しい旅行の首途に立つ。

吉田綾三郎は言つた。「光耀は暗黒から絞り出された閃光である。歡喜は絶望の湖面に浮かんだ泡沫である」。眞に人生平和の歡びを味ひ得る敬虔なる探求者は人生意識に對する最大憧憬者であらねばならぬ。最も雄々しい人生肯定者は肯定への前提としての最も執拗な生命否定者であらねばならぬ。眞なる生命の歡びは強烈な内面的争闘と心靈苦悶を渡り出て初めて味ひ得る。又眞當なる平和の歡びと調和統一の生活の歡びに入る事を得てこそ初めて力強い争闘と緊張と充實との生活に躍進し大きないのちの歩みの第一歩に出る事が出来る。此の時こそ破壊反抗的な病的な生活を離脱して已に人生建設の黎明を見出した時であらねばならぬ。(八月二十六日)

純眞的要因に支持されての全き感激生活は又一種の破壊生活であつた。従つてわけもなく合理化生活へ意識的に進展する事が出来ると思つた私の考へは餘りに早計であつた。到底其の過程は存在するものでない。又其の調和境も發見されない。そして其の調和境を愛

に求め而も單に女性に對する愛に求めて遂に死んで行つた有島氏を想ひ出す。

合理的要因の生活は何と言つても人間本来の純真から遠ざかつた生活である。けれども其の生活が生きる事の記章であるのかも知れぬ。合理化生活に於ける生命肯定は安價であるを否定する私も總ては本来の純眞性が病み疲れて癡癡と倦怠とに裏はれ無意識的に人生合理化生活に入るのだらう。今だ。かう私は想ひながら其の瞬間々々を限りない眞撃でおくつて居る。

私の前には總ては罪ではない。人生感激の醇醇する純眞な懇求であるならば。だから獨り誰よりも元氣を出して雄々しく歩んで行く。

—大正一三・四・一九夜—

幻

X X 生

一兄。

「Back to The Land! Back to The Land!」と云ふ聲が私の耳の周圍で絶えず響いてゐるやうな氣がする季節になつて参りました。青みがした灰色の空氣の何處さば判然しません。その中に動かないでも汗のにじみ出るやうな暖かさが。これも何の點と云つて指す譯には参りませんが。漠とした而も眼を映くさせる光と共に世界と云ひませうか。宇宙と云ひませうかいや大地の周圍と云ひませうか。全くはしのない間に擴がつて居ります。畑の畔に腰をかけて。遠く腕に霞んだ紀伊連山と、唯一線に限られてゐる。眼懐しい茅葺の、群青の色を一杯筆に含めて、一氣に塗り延したやうな面を眺めて居ります。その上の一點をさつき

から見つめておましたらば、その點を中心として、光熱、音、沈黙、生氣、あらゆる人の感する事の出来る刺戟——それが矛盾したいくつかのものでありまして——が渦巻いて、恐ろしい勢、恐ろしい早さでもつて大地を包まうとしてゐるやうです。例へば夏の午後六時に六甲山の頂にあつた一點の白い雲が眼にさらぬ早さで、擴がり出して、「入道雲だ。」と知る時のその早さより遙かに早い速さで、何十倍、何百倍、いや何千倍かでありませう。

一兄。眼がくら／＼ツツします。でも確かその時です。五つも六つもあつてせうか。大きな大きな帆を張りきつた一艘の船がこの港に入つて來ますのは。ほんの一瞬間前まで私は何處にそんな船が動いてゐるのか、いや又どつちの方からそれがやつて來たのか全く解りませぬ。やがて法螺貝を吹いたやうなぼう／＼ツツとした底力のあるやうな汽笛が鳴ります。もう上陸する用意で、大變な混雑です。何とすれば船は最早そんな様子もはつきり解る程近づいてゐますから。船長らしい太い聲も聞えて來ます。船尾では錨を下すやうな音も聞えて來ます。その時は五つか六つの帆はすべて、もうその勤めがすんだ故か眠つてゐるやうに、靜まつてゐます。そんな物憂い中にも、騒々しい二三秒間が續くやうに思はれます。

一兄。やがて乗客が上陸する時となりませう。皆が上陸することを嫌がつてゐるかのやうに、而も上陸を餘儀なくされるやうな様子がつつきからの船中の様子で氣付かれます。あらゆる勞動と、浮世の辛苦とに瘦せた骨と皮ばかりのやうな一人の青年が船から出ることを強ひられるので、重い足を引ずりながら下り口の所までや

つて來ます。其處には船長——船長はさ云へば、馬の革で拵へた奇妙な着物、人間の皮で作つた丸い帽子、羊の骨をくりぬいて拵へた靴をつけた、身の丈七尺程もあるやうな、顔はさ云へば一寸程も白い毛が顔と云はず、顔と生はす一面に深く生えてゐて、眼は骨を喰破つてゐると思はれる程中へ引込んだ、——と、これは又今までどんな滑稽家も嘗て書いたことのないと思はれるやうな顔をした而も満面に皮肉の笑をたゞへた歌の老人が大きなフイゴの側に居ります。

何處かしら落着きのない陰鬱の帳が一面にあたりを蔽ふてゐるやうに見えます。私はしばらくその成行を眺めてゐるやうと思ひます。でも落着いて見てゐられませうかどうか解りませぬ。何とすればあのいやな船長と歌の老人の眼とが一層血走つて來ますから。

一兄。

二三秒の間私は船の中にどんな事が起るかには知りませぬ。が然し唯一つ解つてゐるやうに思はれますのは、人の骨を鏝にかけて削るやうな音のする歌の老人の手を付けてゐるフイゴの音とそれからその音が一分ばかり續きますと、血よりも赤く燃きたれた可成大きな柄のついた鐵片を船長が取り出すことです。船長がそれを持つて右手をあげる時です。私の眼は復ケラカラツツとします。殆ど卒倒する程なのです。それからどんなことが起るか私はそれを表はす、少くとも最もよい言葉を知りませぬ。今までにそんな恐ろしい事を表はす言葉さへないやうに思はれてなりません。

一兄。

そんな時悲しい事には私の眼は涙を流してきません。全くその時です。一種異様な臭氣が黄色い煙の中から鼻を衝いて來て、シュッ／＼と云ふ音さへ伴ひますのはそしてその臭、その色、その音が入りまじつた、はつ



詩歌

桃花その他

並木 行三

午前ひるまのうきくもりにしらしらと咲きつ
いきたれ山の桃花は
根呂の路曲れば見ゆる桃の花しらしら
として夢の如しも
うつむきて足袋の埃を拂ふなれこの山
みちに桃を見にきて
桃見にと山に吾が来ぬ草の上にや、汗
ばみし足袋をぬぐかも
午の汽車遠なるきこゆ山に来て吾が身
一つの春日なるかも

来る秋も寂びしくあれと庭に出て雁來
紅の種蒔にけり

茶の湯氣に少し曇れる眼鏡ごし春の紅
花にぢみて見ゆれ

茶の湯氣に少し眼鏡をくもらせて思ふ
情は人に知らぬな

夜

温室の夜の花は――
赤、みどり、白、ピンクとどりどりに色
は鮮しや滴る、ばかりに
ヒヤシンス赤く息づく灯の下に夢のや
うなれ白蛾がひとつ
温室の中から往來眺めらた皆こちらむ
き人は通るも
温室を出で、月をば仰ぎたれ教會堂の
鐘なりわたる

さくらの歌

夜ふけて一つともれる灯に映へてさく
ら眞白にさびしきものを
ひそやかに三味の音もる、さ夜の更け
さくらましろき灯の下を行く

雑詠

爲房 眞邑

大いなる汽船のはさし二條の煙は高く
高く上れり
港外へ遠く消えたる油船うすき煙を殘

揚る。

勝敗は時運のみ健闘を期す。

二、新しき友に

吾陸上運動部は眞先に諸君におめでたうと申上げま
す。
私達は春夏秋冬懐しい校庭で走り、跳び且つ投げて
居ます。力強い大地を踏み、清い空気を吸ひ、日光
を全身にあびて、心行くまで愉快に快活に捕つて競技
の練習をしてゐます。
諸君我等こそ人生の春です、心ゆくまで踊りませう。
私達と共に。

既に、天野一郎、關寺壽一、山下大藏、白井壽雄、
井上、丸茂、佐野の諸君は練習を開始し、外にも希習
者があります。遠慮なくごしく、校庭に出で一緒にう
ちさけて遊びませう、そして簡潔な生活を讃美しませ
う。

三、創立廿一陸上大運動會

來る五月十一日(日曜日)午前九時より本校校庭にて
陸上大運動會を開きたいと存じます。
同窓諸兄、どうか御家族御同伴の上御出席下さい、
お願いいたします。(白虹子)

登山部

新らしき友に

今日の如く世の中が進歩して人々がその體力腦力を
消耗すること甚大なる時代にはその補ひとして人間に
休息慰安を興へるものを必要とするは論を俟たない。
文學美術音楽なども或意味に於て疲憊の人間に休息慰
安を興へるに違ひないが要する人間の作つたものであ

して行けり
徒然の一日は暮れずなかなかに、松の
こぬれに蟲あまた飛ぶ
ひねもすを勉強に疲れ歸る道に淡く身
にしむ風のよろしき

小曲二篇

ひさし

こひごゝろ

お前を思ふたのしきは。
丁度御庭のくだものが
日に日に赤く熱れ優る
それを眺めて暮す様な
焦つたい様なやる瀬なさ。

草 笛

草笛よ
懐しきは草笛よ。
父の懐しき眼を逃れ
友の懐しきさを避けて
草叢にまろび寝れて
終日草笛を吹き鳴らしぬ。
寂しきに
涙たぎり落つれども
われ見えざる怖と疑を抱きて
人に近づかさざりき。

部 報



開校二十周年並昇格
祝賀記念品

一、標準大置時計 一基

金五百八拾圓也

右正面玄関へ据付けたり、承知ありた
し。

理事 會

陸上運動部

一、對慶應戰

春が訪れた。愛する陸上運動部の若芽も萌え出づべ
き春が来た。陰惨な試練を経て雄々しく奮起すべき時
が来た。

おま目指は慶應である。一度戦つて敗れ、二度挑み
て退き、三度胸を帝都に進め勝敗を決せんぞと、敗北
の怨や深し、會稽の恥を雪ぐべきや今である。蚊龍雲
を呼ぶも今である。冬期のトレイニングを終へ二句の
合奮猛練習を積み、十七戦士駒場へ向ふ、その戦や悲
壯の言に盡く。

諷つて見よ、彼は帝都の覇而も地の利を占む。彼の
老巧に對し我は新進、されど新らしき部員を得て意氣

剣道部

亂れ散る山櫻の匂ふ四月、部には新進の若人数名を
迎へ、文節師範が横井師範に代つて我等を御指導下
さる事になりましたからこの事を皆様に御告して喜な

るから自然の渾然として洪大無邊なるに及ばない。然
し山はそれ自らが自然の彫刻品であり自然の繪畫であ
り自然の戯曲である。造化の神が奔放の意匠と結構と
は擧げて山に附與せられてゐる。
人智の幼稚な時代には山岳を以て禽獸草木の住家か
或は雲霧の亂舞する舞臺とごに見えなかつたもの
が今日では世界の文明國で山岳研究を目的とする山岳
會の設立のない所は殆どない。體力腦力を極度迄費
に使役する文明國民はご時々山といふ人生の休憩場
に入り、その體、その腦を休める必要がある。殊に我
々の日常生活が次第に自然から遠からうとする時如何
にしても自然に歸らうとするのは我等の本性である。
さうしてこの要求を満足さす方法は登山である。
幸にも我が神戸の街の背後には他の都會に求められ
ない美しい景色と登るに便宜ある山が多くある。東は
六甲から西須磨に至る蜿蜒たる起伏は我等に對して自
然が與へた大なる恩恵である。この賜物を自由に用ゐ
得る者は我等である。清らかな水、美しい花、總てが
笑を満へて諸君を待つてゐる。
登山部、それは校内で最も普遍的な解放的な集りであ
る。部員としては定めない。學友總てが部員である。
されば諸君、最も自然なる自然を見る爲に、偉大なる
藝術を味ふ爲に、我等が催す登山の例會に續々御參加
あらんことを衷心より希望して已まないものである。
(龍生)



報 雜

廣告研究會より

新らたに丘の一人とばられた諸君よ。おめでたう。昨日まで路傍の他人であつた諸君と僕達が今日からは同じ丘の住人となつて毎日顔を合す事が出来る様になつたのを喜びます。此の機会に簡單ながら本會の御紹介をしたいと思います。

諸君は今丘の生活に大なる期待を托して居られる事でせう。其に唯正規の學科の負擔では餘りに貧弱です。又此に甘んじられる諸君でも有りませぬ。本會は會員が共に現在の商戰の武器で有る廣告に就ての全般の研究を續けて居ります。本會の創立は大正八年の事で早大、慶大又は昨年創立の關大等の研究會に比して一層古き歴史を有して居ります。換言せば學校内に組織せられた此種の研究會では最古の歴史を有して居るのであります。現在では須藤先生が中心となられて私達を御指導下さいます。近來一向振はないのは先輩から受續いた私達の無能を表現して居る様なもので大變氣恥しい次第で有ります。年度が改まつた此の時機を利用して多數の諸君の御入會を願つて會を盛にしたいと考へます。振つて御入會有らん事を希望致します。

劇研究會より

新學年に當つて

劇研究會など云ふ劇をウイッセンシヤフトとして研究でもして、常に論文でもひねくりまわして居る様に見えるかも知れませんが、決してそんな學究的な會ではないのです。云つて成胸屋や高島屋の身振り口説を見做はうとするものでもないことは勿論です。たゞ劇藝術に心をよせてゐるものが、何の野心も無い「正しい意味での道樂氣」を持つてゐるものが、一の會合を作つてお互にはげまし合ひ、各自が個々別々にやるによるよりも、以上のものを得やうとしてゐるのであります。會に有勝ちな拘束などはちよつとも無く、勝手なことをやつてゐて、それで面白く皆満足してゐるのです。

機關としては月に一回發行の週刊雜誌があり、月に二三次の會合をし、時々各々役割をきめて脚本の朗讀會をします。雜誌には會員の創作、論文、劇評、感想隨筆等が發表されます。また折にふれて團體觀劇もやります。

かう云ふ様なわけですから、此の丘に於て、より潤ひのある、より希望のある生活を欲する諸君は振つて御入會下さい。去年の本三の人が卒業してしまつてから現在の會員は十人に満たない云ふ状態です。私らはほんとうに諸君を——本科の人も豫科の人も——待つてゐます。孰れ近日例會が新講堂パツクルームで開かれますから、其の折はごなたも何の遠慮もなくおいで下さい。會員のすべてが會長なのです。 (一九二四・四月)

丘上短歌會

新しき多くの友達よ、私達は簡臺にこのクルーアの存在をお知らせすることを喜ぶものである。筒臺の文化を嚴めしい白雲の殿堂に例へるならば、我丘上短歌會は、柔いピロッドの緑の小部屋である。紅い花をかこんで、靜かに話を交すさき、我等の魂は淨化され洗滌せられるのである。何れ近い中に、若手の歡迎の意味で短歌會を開きたいと思つてゐる。その節はどうか多數の諸君が舉つて御出席下さらんことを深く希望する。なほ會の年々やつて来た色々の事や、新しく始めた事などは、その席上で委しくお話しすることに。先づ不取敢これを以て報告する。

學生文庫

新しい友人よ。未だ知らない方もあらうが、舊講堂の一隅に存在する、汚しい部屋を見られたか？これ

そ我が學生文庫である。或る人はこれを、簡臺の傳統の噴火口と呼んだ。この文庫に集められた書籍は大部分丘人の愛惜の書籍の寄贈より成り立つて居るのである。なる程汚い書物が多い。しかし、そこには、簡臺の精神が深くこもつてゐることを忘れて呉れ給へ。今年には、出来るだけ努力して内容を充實せしめたい考で居る。委員は今整理に大奮の姿で働いてゐる。何れ近の中に貸出しを始める。續々御利用あらんことを希望する。なほ、乏しい金では幾許の書籍も買へないのであるから、新しい人達も古い人達も一部なり二部なりの書物を寄贈して呉れ給へ。文庫は切にそれを望んでゐるのであるから。(四月十九日大急ぎで)

學校記事

學校日誌

- 三月一日 入學願書受付締切、志願者豫科第一部八百六十六人同第二部六百五十四人計一千四百六十八人外に特別生豫科第一部十三人同第二部五人計十八人
- 三月四日 本科第一年以下の學年第二回試験を開始す
- 三月十日 本科第二、三年の學年成績考査の爲め午後一時より教授會を開會す
- 三月十日 助教授多田德雄に大阪府下へ出張を命ず

○三月十一日 本科第二、三年の學年成績を發表す

○三月十三日 午前十時第十八回卒業證書授與式を舉行し卒業生二百二十二人に證書を授與す(正科生二百二十一人特別生一人)

○三月十八日 入學試験を開始す
教授福田敬太郎に東京市へ出張を命ず
○三月二十日 入學試験終了す
午後一時より教授會開會

○三月二十六日 入學許可者を發表す其の員數左の如し
豫科第一部 同第二部 計
正科生百九十九人 百三人 三百五十二人
特別生 九人 三人 十二人
計 百九十九人 百六人 三百五十八人

○三月二十七日 本科第一年以下の學年成績を發表す
○三月三十一日 教授小川忠藏に東京名古屋兩市へ出張を命ず
講師藤澤穆、同嶋田美一及外國人講師ハイバート、ソオルター、テーラーの囑託を解く京都帝國大學法學部講師落合太郎に國際法及佛語講師を神戸地方裁判所判事池内善雄に法學通論講師を囑託す

○四月十日 水島校長校務の爲め上京す
教授津田武二、十級俸を下賜せらる
○四月十六日 教授田崎慎治、同瀧谷善一歐米出張中の處本日歸朝す
書記合田熊平に大阪市へ出張を命ず
○四月十七日 午後三時より教授會を開く
○四月十八日 書記合田熊平に大阪市へ出張を命ず
○四月二十一日 上京中の水島校長歸任す

衛生監督大高誠の囑託を解き兵庫縣立神戸病院胃腸科醫長藤繩喜代藏に衛生監督を囑託す
楠田小太郎に劍道師範を囑託す
左記十四名を校則第四十條に依り本學年間特待生と爲す
本科第三年生 犬塚 庸介、淺井 孝二
一谷藤一郎、新庄 博、吉川 五郎
本科第二年生 北川 宗藏、小山吉次郎
田中 清、若田 信次、井上 宗市
本科第一年生 和井田藤助、秋田 馨
吉原 三郎、上田 直記
英國人エー、ビー、クラッパを英簿記、商業算術教師として備入る

○四月九日 午前九時より始業式午前十時より入學式を舉行し終て教授會を開く
○四月十日 水島校長校務の爲め上京す
教授津田武二、十級俸を下賜せらる
○四月十六日 教授田崎慎治、同瀧谷善一歐米出張中の處本日歸朝す
書記合田熊平に大阪市へ出張を命ず
○四月十七日 午後三時より教授會を開く
○四月十八日 書記合田熊平に大阪市へ出張を命ず
○四月二十一日 上京中の水島校長歸任す

- (The) policy of guild socialism a statement prepared and issued in accordance with the instructions of the annual conference of the national guilds league. London, 1921 pp. 12°
- Webb, G. Bernard Shaw. *Essays in Socialism*. London, 1920 (xv)+232 pp. 12°
- Spargo, John & Arner, G.L. *Elements of Socialism: a text-book*. N.Y. 1920, 881 pp. 12°
- Thomas, John. *The miners conflict with the mineowners*. London, 1921.
- Walker, G.L. *Capitalism vs. Bolshevism*. Washington, 1919. 147 pp. 24°
- Walsh, Correa Moripan. *Socialism*. N.Y. 1917. 178 pp. 12°
- Webb, Beatrice. *Problems of Modern Industry*. London, 1920. (xxxiv) 285 pp. 12°
- Finney, Rose L. *Causes and for the social unrest: an appeal to the middle class*. N.Y. 1922. 287 pp. 16°
- Schwittau, G. *Die Formen des wirtschaftlichen Kampfes*. Berlin, 1913. (vi)+430 pp. 8°
- Below, Georg von. *Probleme der wirtschaftsgeschichte: eine Einfuehrung in das studium der wirtschaftsgeschichte*. Uebingen, 1920. (xiii)+710 pp. 12°
- Brodnitz, Georg. *Englische Wirtschaftsgeschichte*. Erster. Ed. Beard, Charles. *The industrial revolution*. London, 1921. (xv)+105 pp. 16°
- Bogart, Ernest Ludlow & Thompson. *Readings in the economic history of the United States*. N.Y. 1916. (xxvii)+862 pp. 12°
- Chart, D.A. *An Economic history of Ireland*. Dublin, 1920. 210 pp. 12°
- Gras, N.S.B. *An introduction to economic history*. London, 1922. (xii)+349 pp. 16° with maps. (Harper's Historical Series)
- Hornet, John. *The linen trade of Europe during the spinning-wheel period*. Belfast, 1920. (xiv)+583 pp. 8° with ill.
- Lippincott, Isaac. *Economic Development of the United States*. London. (xiv)+675 pp. 8°
- Usher, Abbott Payson. *An introduction to the industrial history England*. London, 1918. (xviii)+538 pp. 8°
- Powell, Henry M. *Taxation of personal income in N.Y.* 1922. (xii)+436 pp. 12°
- Gerloff, Wilhelm. *Die Finanz- und Zollpolitik des Deutschen Reichs: Jena, 1913*. (xvi)+553 pp. 8°
- Cannan, Edwin. *The history of local rates in England: in relation to the proper distribution of the burden of taxation*. 2nd ed. London, 1912. (xiv)+553 pp. 8°

- Lever, F.A. *A Primer of taxation*. London, 1922. 106 pp. 16°
- McKinsey, James C. *Budgetary control*. N.Y. 1922. (v)+174 pp. 8°
- Plein, Carl C. *Introduction to Public finance*. N.Y. 1921. (xi)+445 pp. 12°
- Sellingman, Edwin, R.A. *The income tax: a study of the history, theory, and practice of income taxation at home and abroad*. 2nd ed. N.Y. 1921. (xi)+739 pp. 8°
- " *The shifting and incidence of taxation*. 4th ed. N.Y. 1921. (xii)+431 pp. 8°
- Shah, K.T. *Sixty Years of Indian finance*. Bombay, 1921. (xii)+540 pp. 8°
- Powell, Henry M. *The taxation of corporations and personal income in N.Y.* revised ed. N.Y. 1919. (vi)+681 pp. 8°
- Meerwarth, Rudolf. *Einleitung in die Wirtschaftstatistik*. Jena, 1920. (iv)+329 pp. 8°
- Fisher, Edmund D. *War and Peace: a price study*. 1800-1918. Detroit, 1918. 17 pp. 12°
- Tout, T.F. *France and England: their relations in the middle ages and now*. 1922. (vi)+168 pp. 12°
- Wilczynski, E.J. *Projective differential geometry of curves and rules surface*. Leipzig, 1906. (iv)+98 pp. 8° (Mathematischen Wissenschaften Bd. XVIII)
- Schroeter, Heinrich. *Die theorie der Kegelschnitte Gestutzt auf Projective Eigenschaften*. Dritte Aufl. Leipzig, 1908. (xvii)+557 pp. 8° mit Figuren. (Jacob Steiners's) Foreign exchange interest tables. Liverpool, 1922. 50 pp. 16°
- Spence, R.M. com. *The master letter writer*, revised 2nd ed. N.Y. c1921. (xxx)+672 pp. 16°
- Davison, E.B. *Handelskorrespondenz*. Deutsch-Englisch-Englisch. Leipzig, 1921. (xvi)+269 pp. 8° (Gloechners Taschenrechner der Handelskorrespondenz 1, 2)
- Clausen, John. *Mensch und welt: eine philosophische des lebens*. 2 Aufl. Leipzig, 1920. (viii)+498 pp. 12°
- Encken, Rudolf. *Die Psychologische Methodologie der wirtschaftlichen Berufseignung*. Zweite Aufl. Leipzig, 1919. (vii)+106 pp. 8°
- Prokowski, Curt. *An introduction to social psychology*. 7th ed. London, 1922. (xxix)+459 p. 12°
- McDougall, William. *The individual and the community*. London, 1922. 224 pp. 12°
- Roper, R.W. *Systematische Christliche Religion*. Berlin 1909. (viii)+284 pp. 8°
- Troeltsch, Ernst & Others. *Systematische Christliche Religion*. Berlin 1909. (viii)+284 pp. 8°
- Lyman, Robert Hunt. *The world almanac and book of facts for 1923*. N.Y. 889 pp. 12°
- Who's who 1923: 75th year of issue an annual biographical dictionary with which is incorporated "men and women of the time" London, 1922. 3037 pp. 12°

- Public Service Corporation of New Jersey. *Catalogue of Books and Periodicals in the Library*. N.Y. 1920. 91 pp. 12°
- Bernhard, Georg. *Die Steuer-gemeinschaft*. Leipzig, 72 pp. 12°
- Brandt, H. J. u. Erdmann, G. *Der Steuerabzug vom Arbeitslohn*. Berlin, 1922. 132 pp. 16° (Elsners Betriebs-Bucherei 17 Bd.)
- Feder, Gottfried u. Buckley, A. *Der kommende Steuerstreik*. München 1921. 106 pp. 8°
- Hensel, Albert. *Der Finanzvergleich im Bundesstaat: in seiner staatsrechtlichen Bedeutung*. Berlin, 192 pp. 8°
- Mombert, Paul. *(Oeffentliche-rechtliche Abhandlungen 4 Hef)* *Besteuerung und Volkswirtschaft*. Karlsruhe, 1922. (iv)+104 pp. 12°
- " *Der Finanzbedarf des Reiches und seine Deckung nach dem Kriege*. Karlsruhe, 1916. 44 pp. 8°
- Schaefer, Dietrich. *Kolonialgeschichte*, 4 Aufl. Erster Bd. Leipzig, 1921. 111 pp. 24° (Sammlung Goesechen)
- " *Kolonialgeschichte*, 4 Aufl. Zweiter Bd. Leipzig, 1921. 148 pp. 24° (Sammlung Goesechen)
- Kanke, Leopold von. *Ueber die Epochen der neueren Geschichte*. 8te Aufl. München u. Leipzig, 1921. (vi)+144 pp. 8°
- Eilers, Georg. *Hamburgs Vergangenheit*. Hamburg, 1922. (xii)+333 pp. 12° Mit 41 Abild.
- Hofmann, Albert v. *Politischen Geschichte der Deutschen*. Erster Bd. Berlin, 1921. 444 pp. 8°
- " *Politische Geschichte der Deutschen*. Band 8. Short History of the British Commonwealth. N.Y. 1922. (xv)+819 pp. 12°
- Muir, Ramsay. *(The) Advancement of Science*. The British Association for the Advancement of Science. London, 1921. 150 pp. 12°
- Kiegan, Helen J. *Practical Business Arithmetic*. N.Y. 1922. (xii)+404 pp. 16°
- Dilthey, W. & Others. *Systematische Philosophie*. Dritte Aufl. Berlin, 1921. (x)+408 pp. 8°
- Law, Maurice. *Die Amerikaner: eine Studie der Voelkerpsychologie*. I. Bd. Das Pflanzen einer nation. Berlin, 1913. 304 pp. 8°
- Granger, F.S. *Psychology: a short account of the human mind*. London, c1891-1909. 237 pp. 12°
- Kantorowicz, Ludwig. *Die sozialdemokratische Presse Deutschlands*. Tuebingen, 1922. (viii)+112 pp. 8°
- Granger, Frank. *Historical Sociology: a textbook of politics*. London, c1911. (xiv)+240 pp. 12°
- Collins, F. *Howard, Authors and Printers Dictionary*. London, 1921. (xi)+407 pp. 16°
- Ricci, Seymour de. *The Book Collector's Guide: a practical handbook of British and American Bibliography*. Philadelphia, N.Y. 1921. (xvii)+459 pp. 8°
- Dickey, Philena A. *Suggestions for the care and Use of Pamphlets and*

- Alauzet, I. *Clippings in Libraries*. 2nd Edition. N.Y. 1922. 81pp. 16°
- Bedaride, J. *The English Catalogue of Books*. 1921. 85 Year of Issue. London, 1922. 323 pp. 8°
- Bertrand. *Commentaire des Faillites et Banqueroutes*. Paris, 1897. 247 pp. 12°
- Blumentahf, Jacques. *Traite des Faillites & Banqueroutes*. Tome Premier. Paris, 1870. 12°
- Boisier, A. *Le Guide des Faillites*. Paris, 1909. 386 pp. 8°
- " *Droit Romain des Droits du Vendeur Non Paye*. Paris, 1890. 100 pp. 8°
- " *Droits Francais des Droits*. Paris, 1890. (xi)+1148 pp. 8°
- Boitel, Julien et Foigney, R1. *Manuel de Droit Commercial Troisième Edition*. Paris, 1890. (iv)+800 pp. 8°
- Bonnichon, Emilie. *Manuel Elementaire de Droit Commercial Maritime*. Troisième Ed. Paris, 1920. 344 pp. 16°
- Bourdeaux, H. *Manuel Elementaire de Droit Commercial Terrestre*. Paris, 1922. 398 pp. 16°
- Carle, M. *La Synthèse du Droit*. Paris, 1920. (viii)+440 pp. 12°
- Castel, P. *Noions de Droit Commercial*. Paris, 1821. 16°
- Cendrier, G. *Des Effets de la Faillite de la Liquidation Judiciaire*. Paris, 1900. 351 pp. 8°
- Collier, M. *Les Codes D'Audience Dalloz*. Treizieme Ed. Paris, 1922. 491 pp. 8°
- Coulton, H. *La Faillite Dans le Droit International Prive*. Paris, 1876. (xi)+163 pp. 12°
- " *Triate Therique et Pratique de la Faillite*. Paris, 1914. 307 pp. 8°
- " *Le Fonds de Commerce*. *Traite General Theorique et Pratique*. Avec Formulaire. Deuxieme Edition Paris, 1922. 600 pp. 8°
- " *The Law and Practice in Bankruptcy: under the national bankruptcy act of 1898*. 12th ed. Vol. II. N.Y. 1921. (xi)+Vol. I. Legislation Nouvelles Faillites. Paris, 1890. 481 pp. 8°

同窓會

本部 神戸高等商業學校内
電話 (兼合) 四三番
振替口座 大阪四七八〇番

同窓會記事

常議員會開催

幹事會の決議に依り左記目的事項協議の爲め、四月十日午後六時より校内商業研究所に於て常議員會を開く出常議員左の通り。

- 肥塚 信二君 武岡 忠夫君
- 藤岡吉太郎君 竹田龍太郎君
- 田中 守一君 生島廣太郎君
- 吉田 長祥君 麻生 懋君
- 須藤 文吉君 小室 武夫君
- 以上

軽い晚餐後左記案件の協議に入る。

- 一、春期總會開催の件
- 二、社団法人凌霜會創立總會の件

一、今回の春期總會は多少早いが例に依りて新入會員並に永らく歐米に御旅行せられて近く御歸朝になる田崎、瀧谷兩教授

楠公前交叉點南側に天華洋行賣店を開きました。何卒御立寄り下さい。

天華洋行神戸賣店
山下彌三郎
(第十八回卒業生)
電話元町一七四〇番

の歓迎會を兼ねて開くこととし日時、會場及提出すべき議案左の通りに決定。

- 一、總會日時 四月二十三日(水)午後六時
- 一、會場 市内明石町三二明海八階
- 一、會費 參圓(新入會員は貳圓)

議案

- 一、會計會務報告の件
- 二、社団法人凌霜會設立と同時に同窓會解散の件

以上

- 二、社団法人凌霜會創立總會を別に催すことは多用中困難であるから此際春期總會と併て催すことに決定是れに提出すべき議案左の通り。

議案

- 一、定款承認の件
- 二、評議員選任の件
- 三、其他創立に關する必要なる一切の件

以上の協議を終り十時三十分散會す。

電話所屬及番號變更

本會専用電話は従來三宮二五七六番の處、今回葺合電話局開局に付所屬變更に

伴ひ、三月二十三日より左記の通り變更實施せらる。

改定番號

葺合 四三番

淺井徳太郎君を憶ふ

津田 恂三

長友淺井徳太郎君を失つて二句を經ず私は日向高鍋に移るこゝになつた。

僻道の地日向の一角に一人離れ住みの身となつて、今、故人を憶ふ心一入である。

「さらば第一義へ燃えませう。若きいのちは去りゆくものを。」と卒業アルバム彼の寄せ書。若きいのちの去りゆくなればこそ愛惜した彼がその若きいのちのまゝに早くも此の世を去つて了つたとは何といふことであらう。亡び去るべくはあまりに早い彼の若きいのちであつた。失ふべくはあまりに惜しい彼の尊い眞情であつた。

想ひ起せば四年の昔、私の丘上最後の一年は、かの埃だらけの學生文庫の大掃除に始まつたのであつた。而して彼も亦文庫の主の一人であつた。それより後文庫一年の生活がどれだけ私を豊富にしてくれたことであらう。それは元より文庫の讀すそれ自身の空氣即ち古くより傳はる文庫の尊い傳統的精神に依るのであるが、出入を共にした彼の眞情に眞ふ處亦少ししない。彼亦その短かりし一生に於て丘上一年の文庫生活に影響せられたるもの決して少からざりしものさ私は信ずる。果して文庫生活により何を得たのであらう。文字

に示さむには、あまりに茫漠として且つ魂の深處に在る。知る人ぞ知るのみである。

文庫を出ては講演部副將として彼の活躍は目覺まじきものがあつた。彼と共に長く講演部の仕事に當つた鶴野君は正に彼の若かりしいのちを痛惜する一人であらねばならぬ。

追憶は美しく哀しく眼に浮び胸に迫る。若きいのちの往くまゝに彼は鮮かにその天分の一端を丘上に残し街に下つた。幼くしかしながら華かであつた彼の丘上生活。顧みて地下に彼は必ずや快心の微笑をなしてゐるであらう。

丘を下つた東京の私に大阪の彼よりの手紙が如何に私の空寂なる下宿生活の哀れさを忘れしめ生き甲斐ある世の中を感ぜしめたことであらう。時を経てその擔當事務の煩雜加はりゆくを報せらるゝにつけ私は彼の才分が自ら上司に認められゆくを知り、彼の満悦を察し如何に喜ばしくおもつたことであらう。然るに通信稍々怠るに至つて、悲しいかな、彼の音信は彼が自身の健康に著しく留意せることを説き延いて病弱なる私を警むる言葉となつた。自ら知る彼はひたすら自重し静かに時の至るを待つたのである。やがて十一年十月私の歸神した頃には彼の健康状態殆んど常態に復し、昨春五月母校二十週年祝賀の時、久しぶりでお互に落ちついた顔を見せ合つたものであつた。爾後事もなく近々米國へ榮轉の内議があるとの噂を傳聞したほどであつたが盛夏の候となり一日彼を訪問するや思ひ掛けなくも「高熱のため面會斷絶」の可なしい御老母の御言葉であつた。この臥床が再度起つ能はざる床に就いたものであつたとは――

それより後は執筆を禁ぜられたと見え殆んど文通もなくかの東京大地震に際しかなり長文の二篇を寄越し

たのが私への絶筆である。今にして思へば遊び廻る暇はあつても見舞ふ日の少かつた私は口惜しい。濟まない。だがゆるしてくれ、まさかに、死ぬまじは思はなかつたのだ。

死去一箇月前二月十日過ぎ元より面會謝絶を覺悟して行つた。然るに會へた。そのまきの嬉しき。牛歳の病床生活に流石に面會はしてゐたが、語る言葉つきも元氣に、此の分ならば春先きの陽氣に向へば、さば彼も云ひ私も信じた程であるのに。その春も待たず一月も經たぬ間に、「花開く前に雷散る恨み」を見せて彼は逝つて了つた。思へば彼はその時最後の顔を見せてくれたのであつたらうか。

亡び去る人のいのちのあはれさは幼きと老いたるを問ふまでもない。しかしながら、我等が如實に世のあぢきなさを知るはいまやまかりの若きいのちの亡びゆくきはであらう。惜しまれて亡びゆく若きいのち。おもへば悼まじきかぎりである。

「第一義へ燃えませう」彼の殘した言葉を永く私は守りたい。

日向の地、今、春たけなはである。呼び醒まして今一度彼に此の廣原を見せたい。私の新しい生活を見てもらひたい。貧しい私の田舎便りを示して豊かなる彼の都のおまづれを聞きたい。

友よ。夢は何處をめぐつてゐる！

(十三年四月十日誌)

不聾閑語

山本 明

「三年不鳴不聾」此の頃友達の誰彼に會ふも、みな接

授代りに此の句を云ふ。私等のクラスは丁度校門を辭して満三年の春を迎へたのだ。然し當世は十年位に延長して云つて貰はないと困る。誰か後進の爲に校長に進言しやうや。」結論は之である。

○ 浅井徳太郎が死んだ。雨の春期卓靈祭にぶら／＼歩いてゐた際、今日葬式が済んだと聞かされて驚いた。歸つてアルバムを開いてみたら「さらば第一戦へ燃えませう。若きいのちは去り行くものを」と書いてある。若き死を豫感したのもなからうに變な氣がした。聞く所に依れば重態の本人も「段々暖くなつたから大丈夫だ。唯周囲の者が大病人扱にするので」と話してゐた相だ。死の瞬間までそれが實感として來ぬといふ事は悲しい事實である。

○ 淺井とは深い交際もなかつたが、ひとつ頭に突つてゐる事は、修學旅行で箱根から修善寺へ行つた時だつた。茶話會の晩にある「女學校でいふ歌を教へてゐます」とか何か前置して「お前ならば何處まで」「さ濟した顔でやり出した。皆が笑つても平氣なもので、意味をなさない事まで附け加へて何時になつても止めなかつた。氣の小さい割に外面活々とした所があつた。

○ 思ひ起せば本三商研の開講は、人数が十三人だといつて坂西先生が「之まで十三人の時は卒業前に必ず一人死ぬ。何回の時も左様だつた——、何回の時にもそんな例がある。厭な数ですが、然し今年津田君(當時講師)も居られるし、先づ十四人と思つて居りませう。」とかお話があつた。卒業前の正月、果して急病の爲に石歸寛一を失つた。もう卒業論文も出來てゐた。

いふ悲惨な急逝であつた、いま復同じ商研淺井が死ぬ縁起でもないぞといふ氣がする。

○ 昨年八月私も温性肋膜炎にやられて、三十九度の熱が二週間も續いた。大病になると思つて苦痛がなくなるものだ。眠つてゐる時でも煩のあたりが絶えず痙攣的に動いて、如何にも苦し相に見えた。さか回復した後に聞いたが、本人は何も知らず安らかに眠つてゐる死の時でもあんな風で安樂に死ぬるんぢやないかと思ふ。そして不思議な事は病氣の頂點では死の恐怖が少い。頭がぼんやりして考へる力がない爲らしい。その時段々よくなつて道がそろ／＼歩ける時分は變に神經質になる。一寸した熱の昇降が氣になる。私ばかりかと思つたのに他の人の經驗も同様らしい。妙なものだと思ふ。深い攝理かも知れない。

○ 病の爲半歳餘を故郷に暮した。他人との交渉に心を傷けるゝ事多く、生きんが爲の都會の生活はたまたまなく厭だと思つてゐながら、餘りに静かな明け暮れは寂しさに堪えなかつた。折も折して眼にこめた「山櫻の歌」の數首が心を離れない。

○ 知れる人みななつかしくなりきたるこのたまゆらのかなしかりけり
いま來よま云ひ告げやらば爲し難き事をして來む
友なしぞおもふ
逢ひてたゞ微笑みかはしうなづかば足りむ逢なり
逢はざらめやも
あやふかるいのちを持ちておの／＼生きこらへたり逢はざらめやも

○ 他人の立場などには全く無關心であつて、然も表面的

中見習士官とたゞやつてゐるかも知れない。水陸兩棲動物よ、自重せよ。

○ 學校を出るまで直ぐ印度へ行つた山田文治が此の夏には歸る相だ。アプガニスタンの近くまで出張したとかで、此の冬は始めて冬に會つたと思へないだらう。彼が出かける前、結婚問題を云ひ争つた末に一つのかけをした。若し歸朝迄に私が結婚してゐれば寄る。不相變獨身だつたら山田がおごるさいふのだ。ヘッセンもあるものが違約はしないと思つて、ごんない／＼土産を持つて歸るかさ大いに期待してゐる。

○ 東京海上を一年で逃げ出し、校長秘書に拾はれた津田尚三が今度は九州落をやつて英語教師になつた。送別會を號して餘り出世し相もない四人が、誘ひ合つて郊外を歩き廻つた。高淵は愛兒俊子の父親といふ幸福なる凡化をやらかした。清淵は不相變センサメンタルロマンチストであるだらう事に於て私と同類である。川端は富豪の附馬になつた爲か誘つても出てこなかつた。此の一日一行が監督に頼み込まれて速成キネマ俳優になつたのは傑作だつた。石段に紙の鳥居が立つてゐる。紙の燈籠もある。女優の一群が華かに下りて來る一行が黙々として上つてゆく。他日×××といふ超特作映畫が表はれる時、キネマファンよ此の一場面に注目せよ。なんて云へば面白いが實は甲陽園宣傳の廣告に使はれたのだ。

○ 昨日けふの暖さに彼岸櫻が一度にばつと咲いた。此處豊中は道にも屋敷にも櫻が多い。私の郷里では決して庭木に植えないが此の邊はそんな迷信もない爲らしい。

夕方から雨になつた。花に降る雨といへば風流だが明日の日曜もどうやら駄目らしい。一人机に向へて唯退屈だ。早く寝るのも惜しいので、同じく退屈であらう級友に讀んで貰はうと思つて、こんな閑語をつらねた次第である。夜も更けて眠くなつたから欄筆する。耳をすませば音もなき春の雨がまだ降り續いてゐる
(四月十二日夜)

シドニー支部會合

拜啓 愈々御清昌の段奉賀候陳者當シドニー支部會合は關東方面震災の爲並に當支部員小池氏の死去の爲に久しく延期致し居り候處去る三月七日アイリツツ街パリスハウスにて開催仕り候
會するもの會員十名即ち當地在住會員全部に御座候華かな電燈の下に新舊會員各々勝手熱を吐く處に同窓會の有難味は有之候。戸田氏のゴルフ談から遂に内海氏をゴルフ黨に引き入るゝ邊り流石に老人組(？)も元氣旺盛に御座候。ゴルフ談より出立したる話題はピシネスの話は抜きにして各方面に及び乍らも時々神戸の話を入れる所流石に前番を築立ちたる者のみの味はい得る懐かしみに御座候。斯くて十一時母校の發展を祝して解散仕候
尙本會幹事は改選の結果戸田氏平井氏の二氏に御依頼するこゝ相成り候(三月十三日)

- 出席者
- 戸田氏(天澤) 片桐氏(兼松) 内海氏(三井)
 - 中田氏(三井) 米田氏(山下) 永井氏(日毛)
 - 平井氏(山下) 久米氏(江商) 網谷氏(兼松)
 - 益田氏(兼松) 安井氏(日織) 永井氏(日毛)

な交渉だけは甘くハツを合してゆく人がある。他人の立場をよく理解して内心では辯護してやりながら、言に出でゝは自分を欺く事が出來ない人もある。
後者が今の社會の薄つべらな人間と相交渉する折にはいつても心を傷けられる。唯一の避難所は親しい友達より外にない。親しい友達にもいろいろある會へば心から嬉しく語り合ふが、離れてゐる時々葉書を出す位で、手紙を書く氣にならぬ友達。會ふと何だか氣づまりで打ち解けないが、手紙では親にも云へない事を打明け度くなる友達。共通の思出を澤山持つてゐる爲に何さなく親しい友達その他。

○ 田中一郎は私の十五年間の同級生である。小學六年中學五年然して神戸四年と學窓を共にした。此の上に尙幼雅園も加へなければならぬが、之は殆んど記憶にない。郵船の香取に乗込を命ぜられ、歐洲の天地をのぞいて歸つて來た。一年遅れたが矢張り十五箇年の同窓である一人と共に、彼を擁して洋行談(?)を聞く。景色は何さいつても瀬戸内海が一番い。メツシナ海峽邊も一寸い。椰子樹の海岸も變つてゐる。和蘭の風車はもつと早く廻るものかと思つてゐた。倫敦の霧は聞くに優つて驚いた。之は倫敦最新流行の洋服だよ。佛蘭西でパーレ、グー、ラングレさきさき皆ソニンといふよ。コンマン、ダレ、グーまではいがメルシ、エ、グーさやられると詰る。水夫の英語は面白い。釣鐘を呉れさいふ所をマナイ、ゴースタンとやつた相だ。それでも通じるから。等々々。

○ 三月中で免稅期間が切れると船が全速力を出したので、甲種勤務演習の爲四月一日入營を命ずさいふの間に合つて仕舞つた。こぼしながら姫路へ出かけた今頃は此の聯隊で倫敦を知つてゐるのは聯隊長殿と田

神戸一九二三會

一雨來つて春暖忽ち催し初めた彌生の末つ方前臺に一同が決をわかつてから早や一年、出勤のみちすがら薫る春の朝風も去年の此頃を偲ばせる折、一度皆が膝を交えて話してはどうかとの久々に逢ふ友達からの希望もあり、又委員の任期も此三月で盡きて了ふのでどうしても一度行ななければならぬ立場にあつたので決算問際の仕事もなを奔走してさう／＼三月二十九日の土曜の夜相生町の三輪で開くことにして神戸在勤のもの四十人に彌狀を發した。さて集つて見ると委員の不破廣田をこままで僅かに十人、勿論一週間程前からの不安定な日和の爲めに大分身體を損ねてゐられた方々もあつたが、たゞの會合にほんの十人、しかもその中、兼松四人を除けばあさ六人は香しからぬことではある。確實に豫期した人が數人突發事由で見えられなかつたのは何さいつても残念であつた。
その夜は雨霽れた春の宵。なじみ深い三輪の一室に一同がしんみり打ちあけ話の時のたつのを忘れる。語るにつれて益も遡る、一年間に得た實社會の經驗を笑聲や感動で拜聴するがと思ふと、今度は嬉しい身の上話で一同を謹聽させる、腹にしむ友情のうま酒に酔ひ、春宵の一刻を充分にエンジョイして散會したのは十一時頃だつた。
當夜の出席者は左の通り。

- 北村 福松 小田 八二 緒方 俊夫
佐藤哲四郎 榑原 零一 上田 秀達
依藤 哲二 齋 兆 兼 不破 直之
廣田 喜一

因みに、神戸一九二三會の代りに、一部の人々の間に行はれてゐるひな菊會(七期卒業生)の名稱を好意的に讓つて戴きたいと思つてゐる事を附記しておく。

尙、四月から九月迄の委員は左記の方々に御願することになりました。

細川喜代造君 陰山 茂爾君 木村 定一君
北村 福松君 小松榮之助君 兒玉 利武君
(十三年三月末、廣田記)

十二會例會の記

三月十二日正午から十五時階下の太陽軒で三月例會を開く。集る者

古川、八家、濱、井關、小森、木村、宮尾、西村、大崎、阪本、横田、大木、北里、阿部、原田の十五名の外に賜暇休暇で香港から帰る探しに歸つて来た鈴木演田を合せて總勢十六人と云ふ割合に成績の良し集りであった。どうか今後此調子で皆奮勵して欲しい。演田は色々格好よく大つて来た。只遺憾に堪えぬのは色々事情の爲め幾分の不参者があつた外に、之れも香港から歸朝した物産の谷田が珍客の一人として顔出しする筈だつたが大旅行といふ邪覽物に誘はれて出られなかつた事久し振りに出る事云つてた母校の福田が急に公用東上のため留守になつた事物産の東が公務多端の餘り食事を済ませた後で今日の事を思ひ出した事日本汽船の寺田がお客さん見送りの爲め一時過ぎ迄に來なかつた事などである。而して又感謝に堪えぬのは堀江、阿部、原田といふ貧弱な幹事であり乍能く此成效を齎して呉れた三井の横田の盡力と、時間に稍々遅れても猶且來て呉れた鈴木木宮尾、差支があつたのだが歸りの電話を懸け損つたからさまで態々出て呉れた國際汽船の小森兩君の厚い友情などである。

次回の幹事を北里、小森の兩君に依頼する。

在京一九二二會

一、報告

昨末筆、本會は大抵月の十二日に開く事になつてから在神戸以外の同期生諸君にして其頃當地へ來られる様な機運に出會したら萬障を排して出て呉れ給へ、必ずしも幹事に告げなくても會員の一人に知らせて呉ればその一人の常連はやがて時の幹事に報告するであらう。(爲坊誌)

啼かす飛ばず。併し丘を下りてから早既三年の年月を経た。三月二十九日の夜日比野の陶々亭で支那料理で記念の宴を張る。

大正十年十月八日第一回會合を催した時にはNが安心した様にバチエローばかりであつたが、三年経つた今日ではその時に心配したり安心したりしたNを始め四五名家庭を作つてゐる。然し幸が不幸が第二世のある者は一人もない様だ。それにつけても地震さへなかつたなれば親交になつてをうたであらう所のKが震災の悲劇を語り出す今までオーゲストラが好い、ソロの方好い、第三者に解し難い議論を戦はしてをうた連中も急に聲を止めてKに申意を表す。

上海歸りのNが何か支那語で酒の注文をする。又一頼り杯が巡る。船屋のKが來月の初めに紐育に行くことに就て今の情態のまゝでKを彼地にやることは國辱ださどが云ひ出す。人種的偏見ださ反駁するほどのコスモポリタンも居らず、愛國者ばかりであるのも妙。春の宵に、しかも支那の酒さ所謂先輩の甘い御馳走まで陶然として時の経つのも知らず會する者次の十一名。

天野 俊一 藤本 胤一 小泉 巖

二、報告

五月の初めに小松君が紐育へ行かれることになつたそれで君の送別會を兼ねて四月二十七日(日曜日)に鴻臺、江戸川の方面に一日の清遊を試みやうと思ふ、同期生諸君の揃つて参加あらんことを。(詳細後報)

上野福三郎、高木鐵二君送迎第三回生會

四山生

T君、久しく御無沙汰したが相變らず元氣が、東京の連中はいつもの事ながら實に勤が、一度君に見せたいやうだ。

これもその元氣のいゝ一例だが表題のやうな會を催したよ、時は舊臘の十八日、場所は牛込の常盤で、丁度近く紐育の三菱の支店長として渡來する上野が上京して來たし、其の前に臺灣銀行の横濱支店長として高木が支那から歸つて来たしするから、それを兼ね、送迎の歓迎の爲め、又一ツには震災以來の御互の無事な顔を見たい爲め、師走の忙しの中に不拘、一會催す事になつたのだ、そこへ飛び入りとして小樽からの橋本神戸からの岩田が加入したの、賑かな事想像に難からずだらう。

床の正面には當夜の正客として色の黒い、だが地位が上つて肥つた上野(金は出來たかどうか知らない)に、たとへ鼻下に型ばかりの髭を蓄へてもやは

り可愛い童顔の失せぬ高木に、故郷は日向で先祖は炭焼かと思はれる許り黒々としてゐる日高に、これは又頭顔見事に禿了し終りて紅顔何處に去りし尋ねんとするに證據なき岩田が鎮座してゐる、それから鍵の手に廻つて、昔し乍らの黒さどう要君、三橋のおやぢ(もうぢぢいかな)、雄辯滔々として日本中を肥料だらけにせんとする鈴鹿、昔より一層若くなつたが口はひれくれた三浦、兎のやうな可愛い眼付は昔と變らないが髪は白くなりかけた(此頃刺り落したの其の爲めらしい)米津、布袋の置物みないな橋本が列んでゐる、それに向ひ合つて何事にもスマートで何かの道にもすばしつこいさか云ふ噂のさつた和田(これは噂也文責記者になし事實すばしつこかつたらしい阿部(これも眞偽を明かにせず)昔體操の時には一番だつたが今もやつぱり背が高い處へ黒々美艶を生やしたので屋根上の仁丹の看板みないな藤森、それに自分(さんざ他の悪口を書き乍ら自分は無事にすませる處が記事を書く者の役徳さ)が末席を汚したと思ひ給へ、すつと顔を見ただけで嬉しくならうぢやないか、酒興自ら潮かざるを得ないぢやないか。

T君、おれは辭振ふと君の事を喋りたくなるのが病と見える、それで當夜も、例の「白馬のよだれ」だの、「馬屋の借金」などをしやべつたよ、今後も機會さへあらば、しやべる積りだ、全くこの二ツの小話などは職つて置くのが惜しいと思ふ、何れ會誌で滿天下の同窓生に話してきかせたいと思ふ、それが困るなら今の内に早く申越し給へ、但し無條件では應じないよ。

尤も當夜しやべつてゐられたのは初めの僅かな間だけだつた、酔が廻る……これが又同期の會さな

るさ實に早く廻る……第一に小樽が踊り出す、それに連れて誰れ彼れが立ち上る、管を巻く男がある、得意の「宵や町」を唄ふ男がある。どれも昔可愛い男だ、テニスの應援に岡山迄喧嘩をしに行つたりホートレースに暴慢不遜の某校の選手を殴りつけた連中だ、金ボタンに佛蘭西帽の制服姿が目に見えるやうだ。

T君、去年の五月十三日母校二十年記念祝賀會の夕、君始め在神戸の同期の連中と三宅で飲んだのは實に近年にない快心事だつた。殊に久し振りで布引温泉に一浴した心持は海に何にたさえんすべもない程楽しい事だつた、母校四年の夕べ、にほくはあの温泉に浸つてゐた、テニスの練習のつかれを湯に醫やして温泉の庭に出るさもう夕月が明るく葉越しに照つてゐた、樹々の露、灰白の瓦斯の光、何かものなつかしく、詩でも口ずさみたく堪らない氣持がした……その心持を十五年振りで味はして貰つたのだつた、こゝに更めて深謝する。

閑話休題、當夜はそんな事でもう面白く愉快に飲み續けた、さういふ夜も更け看もつきた、夢心地で自動車に乗つたのは一時に近かつたか、沼津へ歸へれなくなつて和田のうちへ泊まるさ云ふ橋本とそれを連れて行く和田とに穴八幡で別かれて、ぼくは我家に歸りついた。

附記上野は其後目出度く再婚して二月下旬横濱を立つた、高木は依然横濱で自分のものでもない金を貸したり預つたりしてゐる。橋本は北海道から九州へと飛び歩いてゐる、外の連中もみんな元氣でそれと働いてそれと子供を殖やしてゐる、ぼくか、ぼくは毎日つまらない顔をして高田馬場さ丸の内を往復してゐる、元氣は元氣だが子供は

其の後殖えない。一度上京したまへ大いに歓迎するよ。(終)

東京一九二〇會

大震大火で死線を越えた連中も其後は夜警じや後始末じやさ疎でも無い難用に追はれ電話も不通さ來てゐるのでお互日頃の心掛が長かつたのか、命に別條無かつた事丈は判つてゐても頼と顔を合せせる機會が無い、丁度其處へ青島正金の北本君が孟買支店へ轉勤になるさで久方振りでお江戸へやつて來たので早速寄らうと云ふ事になり當番幹事の三菱の三宅西澤が世話役となつたもの、第一恰好の場所は無し案内するにも電話が仲々かゝらず遠道郵便などでやつと一通り案内だけは濟せて二月二日夜六時から牛込の川鐵に會合する。折折降りしきる雨を衝いて文字通りの泥々道を長靴バサ

と集つたのが左記十二名

富士紡の石津、興銀の榎並、三菱の西澤、三宅、正金の北本、三井の島原、鐵道事業の池増、三四の大井、東棉の長澤、東京朝日の田畑、東京海上の稻垣川口、

震災の話學校の思出マイア子供の詮議誰でも喜ぶ徹底した秘話と次々に話題が移り滿堂和氣さ、その料理が胃の腑を満し酒が顔に廻り出すと商神デカシヨ、木曾節から安來節と知つてゐる限りの歌を歌鳴る。それにしても徳利が空になつたさ云つては幹事料理が一つ足らぬさ云つては幹事、何の事は無い幹事は幼稚園の生徒の守りをやらされてゐる様なもの、そして教し事も幼稚園同様、いや此連中でも學校に居る時分は試験前に頭痛鉢巻やつたものだと思ふさ可笑しくなる。卒業後皆能辨？になつた事は感服く仲に

たつた一人酒が廻り過ぎて口が廻らず手眞似足眞似でやつと思ふ表示をしてゐた奴もある、ホヤ／＼のお父さんの大江君が例によつて事實特許の○○節をやる、當夜の珍客島原君がダンス話で新しがる、だんまり家だと思つた川口君が海損係の職掌柄鍛えたものかよく喋るやうになつて男を擧げた、眞面目な北本君が四年も昔の横濱半頭武雄浪子の別れを目撃者の一人として紹介したのは幹事も閉口した、丸焼けに會つた田畑君が同窓會から見舞金を貰つた事聞いて寄附を大分勸誘したが効目が薄く、代りに北本君が未だ支度料を收得した譯でも無からうに皆の氣焔に當てられて寄附を申込んだ真き前例が出来たものと幹事拜受して置いた、かくて散會したのは十時半、神樂坂の赤や青の燈が兩道に寫つて何と無く薄ら寒かつた。

◆當夜の寄せ書集

珍客北本君を迎へて久し振りに會つて震後初めて無事な顔に列べた十有二名不相變學生氣分なのは嬉しい池増。

大震災に生残つて此處に同期生十二名相會する事を得た事は何より嬉しい事だ三年経つても四年経つても不相變氣分は忘れられぬは御互に元氣で此意氣で勇往邁進する事だ——長澤。

幸に命の掛替を持つた連中のみが集つた皆馬鹿になつたのが何より嬉しいお馬鹿の讃禮、馬鹿の讃美!!!——末。

地震後始めての顔つなぎ長い奴丸い奴美少年昔さちつとも變つてゐないのが何より嬉しい飲む事喋る事何れも仲々衰へてゐないのが嬉しい——就三。

長い奴とは俺の事を指してゐるらしいが外の奴だつたら只では置かないのだが諸君の事だ喜んで甘受し置かう——E.

▲皆が騒いでゐる中に坐つてゐると、黙つてゐて、丘の歡喜が随つてくる(登志)

▲大いに痛飲し水島校長先生の御健康を祈る(正治)

▲昔廣だが、みんな同じ顔だ。而も皆んな阿修羅王の様な元氣だ(のり)

▲酔はなあんだぞ(島)

▲只懐しい(花)

▲酔ふた、お勝ちゃん、お龜さん(木村)

▲洋服姿の未來ある重役、何か寂しい影がさす、角帯姿の情ない番頭、矢張之でも人の内、ほんに、情がないわいな(幸雄生)

▲大正十三年三月八日神戸高商株式會社副重役會議開催(旭ビル生)

▲ラクトーゲンの自慢の味を、ぬしに知らせに鳴く干島(清路)

▲筒裏への復讐(A)

▲鏡重生活(の感激(荒卷))

▲みんな真いなだ。しかし、俺だけは矛盾だ、只もう騒げ(YO)

▲夢の花。夢の丘。健在なれ(シゲル)

尙ほ當日會費殘金貳拾貳圓五拾錢也大會へ繰越の事御承知置被下度し。(小川生)

京濱十一期會

拜啓貴君益御健勝之段置し上げます。昨年の大震災以來の、じ、な心持も春雨の降る毎に潤はされて來る心地も致されます。吾々神戸の其合費の第十一期卒業生も一堂に會せざる事絶えて久しいものがありますので一度地震にも

孟買行正金北本を送るしつかりやれ、川鐵に於ける十四期生の氣焔萬丈海外に於ける同期生に遙に思ひを馳す、商神の歌——川口純二。

久し振りの盛會、幹事信任案講場一致可決一寸現内閣と反對の現象だ、酒の廻るにつれて燥やぐは、駄々子揃ひの在京十四期生萬歳、次はヒクニツクをやらうよ——たけな。

震災後皆目元氣な顔をして昔の様に愉快に語り且飲む實際に愉快だ——生。

三年振りに内地に歸つて死線を越えた諸兄の元氣な顔を見て何より嬉しい、金ポタンが背廣に變化しても氣分は筒裏時代に同じ、鳴かず飛ばすの三年はごつくに過ぎた尙動かさざる事泰山の如し——北本信一。

當然被服廠跡組の「」に入つて居るべき者幸に平素性善なるの故を以て一命を取止む同窓會よりの見舞金大枚五拾圓也正に落掌候也茲に謹で衷心より深謝の意を表す——忠治生。

神戸高商は日本一だ、どうしても日本一だ——三宅生。

因に幹事重任と云ふ事であつたが結局今回は大江、田畑兩君がやる事になつた。尙今回は御存じの通りの事情で突然の案内だつたので差支が有つて缺席した連中も有つたが次回から皆出席の事にした。

終りに今頃は椰子樹の並木道に涼風吹きそよぐ孟買の地に在る北本君の健康を遙に祝福する。(たけな記)

大阪一九二二三會

會日 三月八日夕

火事にもヒクニツクもせず無事で居る顔を描へて復興の春の宵を筒裏時代を追憶して心行くばかり漫談閑話に更し度いものと思ひます。出来るだけ御都合はせ下すつて是非御出席下さる事を切望いたします。

こんな通知を發して去る四月五日の夕方新橋今朝牛肉店に參集したのが稻畑自動車部の細川、印刷屋秀英堂主人堀澤、久原の多川、三井物産の萩原、濱口商事の富井の五名、出席者は豫期に反した少數だつたが馳せ參じた面々は何れも一騎當千のつはものなり。メートルがあがるにつれて各々負けず劣らず氣焔を吐くやら議論をするやら。笑談いふやらシヤレルやら。さては細川の世界一の自動車自慢話、堀澤の印刷業經營苦心談より果ては人生問題から性的問題にまで話に花がさき春の夜の更けるものしなかつた。

當日參會者のあまり少なかつたので最近もう一度趣向をかへて集まらうじやないかと約束して十時すぎ散會した在京濱同期生諸君次回には奮つて御出席あらんことを切に希望いたします。(元公坊記)

第十四期生午餐會

鈴木の人達の肝煎りで、こうした會が生れその第一回と云ふのが去る三月二十九日村井銀行の地下室で開かれた。出席者は左記の十三名で本場の神戸でコレだこあつては他所への手前願の情ないと思はれる節がないではないが、何しろ足掛四年振りの會合ださあるから、ソ、ナ、不平等は風に何處かへ逃げ込んで只脚もなく嬉しがること嬉しがること、オ天道様の手前アカンシヨを出すことは遠慮しても短い時間乍ら此の意義ある會合を十二分にエンジョイする事が出来た。そして次の

會所 南地、岐月樓

- 會人 二十九名
- 荒巻 修 大内 恭行 細川喜代造 中川 康一
 - 岡本 憲司 藤倉 重雄 佐々木良宗 平林 俊夫
 - 矢部 利茂 生駒弘三郎 久富 保造 吉田 林造
 - 中井 賢二 本田 信吉 中島武四郎 石光 憲
 - 林 正治 大林 敏夫 江藤 順藏 松川 省三
 - 今田 益三 伊藤 榮二 木村登三郎 金田 昇藏
 - 島田 俊夫 吉村喜三郎 箕田 貫一 伊勢谷良一
 - 小川 茂

卒業してより早や一歳はめぐりぬ。故丘の櫻の、またしても美しく咲き笑ふにつけ、各自の胸に誘ひ迫るは、同期生の懐つかしみなり。時も彌生八日茲に美事なる大阪會の誕生を見ぬ。

出揃ひし顔觸れを眺ふに、その形装は紳士態宜敷取交ふ挨拶も、いさ済ませしもの、追々酒の力に御意斜ならず、昔を偲ぶ荒武者振り、色事師振り鮮かに清談、時談、商談が、いつしか饗談、綠談、極談、さまで落下りて、さては、踊る、謡ふ、其他の大亂行、婚期を前の若殿方の勢、さても凄じく、流石越前江の南の情調、その艶麗に彩られ心ゆくばかりなる春宵の尙ほ淺き怨みありしも、一同十二分の歌を盡しぬ。

思ひを遙るか西空に走せて、母校の榮祥を願ひ、商神を呼喚せし頃は、夜もいと更けるたりと覺ゆ。

當夜の與世書き次の通り。

▲久し振りに丘の連中が集つて楽しかつた。あの時代の氣分に還つた。あゝ、楽しかつた時代よ(松川)

▲學校を出て丸一年、久し振りで今宵は丘の氣分に歸つた。矢張り思ひ出すは足的生活だ。丘で鍛へた健脚で俺は世界中躍つてやらふ(平林)

▲俺たちの時代が來たら……今に見てゐる。日本は俺達を送りだした丘を祝福するだろふ。愉快。愉快。(益)

様な條件で此の會を長く續けて行かうと云ふことに案斷一決して解散した様な次第であつた。

一、會の名稱 とう云ふ事は色々出て即座に決り難い問題で事實當日は其處迄及ぶ餘裕も無かつた様であるが何れ次回も夫々妙案が出る事と期待して居る、猶當日氏からは「土曜會」の提案があつた。

一、會期 例會は毎月最後の土曜日正午より。そして年二回特別會を開いて大いにメートルを揚げアルコールの注入を許す事、差當り第二回例會は四月二十六日に當る。

一、會場 村井ビルディング地下室(東洋軒)

一、會費 何うせプロの多い筈の會合且又毎月の事でもあるしするから會費はミニマムに切り詰む事、且面倒を除く爲め當日持参され度き事。

一、幹事 持廻りの事、なるべく幹事の手数を省く爲め通知の如きも只人数を纏める都合上電話で問合せるに過ぎないのであるから時に通知洩れ等が起るかも知れないが其點は豫め諒解ありたき事、原則は同期生の自發的參加にある猶次會幹事は左の通り。

兼松商店 中 磯 音 高

電三宮二二〇外三

出席者

- 谷田義一、生島廣治郎、黒木彌千代、今村頼吉、日野俊夫、井上興之助、大松義男、山田恒雄、宇野又夫、福永規矩夫、川端藤三郎、中鹽吉高、秋葉四郎

(音記)

會員動靜 (三月十一日より 四月十五日まで)

○轉居先御通知なき爲め會報其他の通信物が戻り困ります
○御互の利益の爲に是非お忘れなき様御消息御通知願ひます

A の部

●赤塚 武雄君(二六) 神戸三井銀行支店より上海九江路四、同行上海支店へ轉勤

C の部

●長 政五郎君(一五) 大阪倉敷紡績會社營業部勤務の處、大阪府北河内郡枚方町同社枚方工場へ轉勤(電話三三二)大阪府北河内郡枚方町大字枚方一七八ノ三二、(現住)

E の部

●遠藤 歌三君(一〇) 大阪市東區北濱五丁目住友銀行本店勤務の處大阪府北區中之島五丁目同行中之島支店へ轉勤

F の部

●淵上 昌一君(一七) 東京市本郷區合同グリセリン株式會社假事務所より麹町區永樂町一丁目同社へ轉勤

●藤田 保種君(八) 轉居・神戸市西灘村若屋水戸一五、勤務先從前通り

●藤原 米造君(六) 自營・轉居・神戸市播磨町一六、海運器具(自營)電話三宮二一四七五九六二番、武庫郡御影町郡家上山田一〇二に轉居

●飯田今太郎君(二二) 現住・神戸市西須磨東町下二二ノ一、

●池田 義秋君(商大卒) 大阪府東區清水谷四ノ町三〇八、村田長兵衛方へ轉居

●今井 明君(一六) 岡山歩兵第五十四聯隊へ入營中の處滿期退營大阪三井銀行大阪支店へ復職(現住)武庫郡今津町東中畑一六八、野田朔方

●今中 仁三君(商大卒) 岡山縣倉敷紡績會社を辭職し大阪府東區高麗橋四丁目三十四銀行營業部へ就職(自宅)大阪府北河内郡樟葉村

●入江 信夫君(一四) 病氣靜養中の處漸く輕快和歌山縣御坊町日出紡織株式會社へ就職

●入部 泰藏君(二二) 轉居・大阪府東區北郡瀨寺町船尾七三八ノ三、(南海線御坊の森驛東半丁)

●岩田 承平君(三三) 轉居・名古屋市東區石町一ノ二八、

K の部

●門松榮之助君(一〇) 佐世保住友會社仲鋼所勤務の處大阪府北區安治川上通一丁目二二、同社仲鋼所販賣課へ轉勤

●蔭山 豐君(一三) 大阪西區住友銀行川口支店勤務の處東區北濱五丁目同行本店勤務に轉任(自宅)武庫郡西宮町前松原一四〇ノ一、

●神成 彌七君(一〇) 勤務先・川原商店は東京麹町區永樂町二丁目臺灣銀行三階へ移轉 住所東京市外下流谷向山一四一八へ轉居

●龜井 鶴松君(一四) 神戸市榮町通中島保之介商店勤務の處休職京都帝國大學經濟學部へ入學 現住從前の通り(住)二)京都市上京區淨土寺西田町一五、

●藤森兼三郎君(商大卒) 商大在學中の處卒業、神戸海岸通大阪商船株式會社へ就職(現住)神戸市葦合町二〇九二ノ四、高瀬方

●富久田太藏君(一四) 現住・京都市諏訪町五條上ル

●福井 邦藏君(八) 臺北基督教會辭職、渡米二三箇年留學(五月出發の豫定)アドレス左の通り
The Oberlin Graduate School of Theology, Oberlin Ohio, U.S.A.
留守宅・京都市下鴨松ノ木町八六、

G の部

●後藤 謙三君(五) 東京市日本橋區第一銀行より大阪府東區高麗橋三丁目第一銀行大阪支店へ轉勤(現住)武庫郡大社村香榎東雲筋(阪急電鐵夙川停留所西南三丁)

H の部

●早川 登君(一六) 歩兵第一聯隊入營中の處滿期退營、東京三井銀行本店營業部に復職(現住)東京市外上戸塚町九四八、

●早川宗太郎君(五) 轉居・東京市京橋區尾張町一ノ十、

●林 庸夫君(八) 神戸三井物産會社より東京市麹町區有樂町同社本部業務課へ轉勤(現住)東京府下千駄ヶ谷町八三六、矢野義弓方

●林 市録君(商大卒) 加藤改姓、次の通り住所變更、大阪府南區末吉橋通四丁目二八、

●林 隆介君(一六) 報告洩れ、大阪府西成郡玉出町六四四へ轉居、勤務先は從前通り

●日高 園助君(三三) 轉居・東京市小石川區宮下町一、

●平岡 敏之君(二二) 轉居・東京市外大森馬込

里本精造方

●香川 良三君(一) 轉居・東京市豊多摩郡大久保大字百人町二四四、

●金子民次郎君(三三) 轉居・大阪府外十三元町三三二、(阪急十三停留所より東へ約二十間南側)

●加藤 三郎君(五) 朝鮮平安北道江界朝鮮殖産銀行江界勤務の處慶尙北道同行浦項支店(支店長)に轉任

●柿原 夏雄君(一七) 京都市三菱銀行京都支店勤務の處教育召集を受け四月一日より六月三十一日迄大阪歩兵第八聯隊第九中隊補充兵第一班へ入營七月一日より從前通り

●河瀬 直忠君(二六) 大阪府北區天神橋筋大坂合同紡績會社天満工場勤務の處堂島濱通二丁目同社本店に轉勤

●木下 茂君(二〇) 現住・東京市外品川町字南品川邊間一四七〇、

●衣笠豊太郎君(二六) 勤務先・長崎紡績株式會社營業事務所に大阪府北區中之島三丁目六一へ移轉

●吉祥 光四君(二六) 大阪府北區電氣企業會社を辭職大阪東區高麗橋三丁目安田銀行大阪本店へ就職

●小林 吟二君(八) 現住・大阪府豊能郡豐中村北屋敷

●小出 憲君(二〇) 門司住友銀行門司支店勤務の處神戸市兵庫宮内町住友銀行兵庫支店へ轉勤

●小平隆太郎君(六) 電話開通並に分店開設、大手九七五番より九七九番迄(臨時本町交換所(所屬)接線第九番、東京市神田區駿河臺西紅梅町九、(御茶の水橋際電車通東側)隆榮商會小賣部御茶の水分店

●小松榮之助君(一七) 神戸石光季男商店勤務中の處病氣の爲め退店神戸市野崎通二丁目五二ノ四に於て病氣靜養

村字谷中一〇五一、

●平岡 武雄君(一五) 岡田改姓、大阪府東區備後町大阪野村銀行へ轉勤、阪急沿線箕面村平尾に現住

●廣田正市郎君(一七) 大阪府東區堺筋南久寶寺町二丁目四木本商店へ就職

●堀内 英夫君(一五) 東京三井銀行本店勤務中の處一月より病氣の爲め休職、大分縣別府市杉屋に於て靜養中

●星野 保君(一五) 神戸鈴木商店勤務中の處病氣の爲め一時休職武庫郡津名郡洲本町内外通六丁目に於て専ら病氣靜養(電話洲本三三九九番)

●細川 壽男君(一一) 大阪府南區株式會社稻畑商店自動車部勤務の處東京市日本橋區堀留町一、同商店へ轉勤(今般當地勢自動車部に於て斯界の一權威泉欽次郎氏の入社を得更新大いに奮勵努力可任事相成候に就ては將來の大坂本店自動車部を引揚げ専ら當地部に於て經營致す事と相成候間何卒倍舊の御眷顧御引立に預度奉懇願候)

I の部

●市川 忍君(二三) 神戸大同貿易會社辭職京都市室町通四條南入株式會社丸紅商店細部へ就職(自宅)京都市猪熊通丸太町下ル

●井上與之助君(二四) 神戸鈴木商店外國電信部より輸入木材部へ轉勤(現住)神戸市西須磨字池ノ下一三、

●泉 威八郎君(二二) 轉居・武庫郡大社村西字萩ノ戸一七九四、(阪神電車武庫川停留所北側半丁)

●池川 重吉君(二〇) 上海鈴木商店支店勤務の處東京市丸ノ内仲通十四號鈴木商店東京支店木材部へ轉勤(現住)牛込區市ヶ谷佐内町九、

●伊藤吉次郎(四) 堺市大日本セルロイド會

M の部

●駒井清次郎君(商大卒) 東京市麹町區永樂町二丁目合名會社保善社(理財部)へ就職(現住)本郷區駒込千駄木町五七、愛靜館(電話小石川四五二番)

●前田 寛一君(二四) 勤務先・株式會社藤本ビルプロカー銀行横濱支店は横濱市本町一丁目一〇へ移轉

●柳田和一郎君(一六) 姫路歩兵第三十九聯隊に見習主計として勤務中の處退營、從前通東京丸ノ内森永製菓株式會社本店へ復職

●松本 巍君(一一) 轉居・武庫郡樟葉村ノ内打出字下宮塚六、

●松本孝次郎君(商大卒) 東京市丸ノ内三菱海上火災保險株式會社へ就職

●松村彌三郎君(一六) 大阪歩兵第三十七聯隊入營中の處退營、從前通大阪府北區電氣企業會社に復職(現住)武庫郡今津町津門四ノ口九二〇ノ一、

●松居 吉應君(七) 轉居・東京府住原郡平塚村小山五〇六ノ二、(山手線目黒驛又は東海道線蒲田驛で目黒蒲田電鐵に乗換へ洗足停留所下車徒歩四分、田園都市地區内詳細は停留所前田園都市會社にて御尋ね下さい)郵便物は當分左の通の宛書に願ひます東京府鎌谷局管内住原洗足町二八五、

●松阪啓太郎君(四) 大正十二年來扶桑海上火災保險會社辭職東京市京橋區南鶴町一丁目九番地に於て諸印刷機械製作印刷附屬諸材料販賣自營三月二十日開業と同時に(住所)營業所に移轉製作工場大阪府外中津町下三、

●三神直三郎君(一五) 京都市上京區下鴨中河原五四ノ一、藤岡方へ轉居

●三宅啓一郎君(四) 外務省臨時平和條約事務局第一部國際聯盟係に轉任の處同省參事官兼任を命ぜられ尙臨時黨義救護事務局事務官兼任

●宮本 昌三君(五) 函館市谷地町三(轉居) (電話二六五一番)
●宮坂 國夫君(七) 東京海外興業株式會社比 律賓郡島出張中の處東京市麹町區有樂町一丁目同社勤 務に轉任
●水谷 恭三君(八) 轉居・三重縣桑名町字桑 名一三〇、
●水谷 一雄君(商大) 東京市外大井町篠谷六一 〇二、一如洞(轉居)
●牧野 邦次君(一五) 海老原改姓・大阪府立 今宮職工學校(就職、神戸市熊内橋通三丁目四〇ノ一、 轉居)
●持永 善美君(一五) 大阪住友銀行本店營業部 勤務の處横濱市本町二丁目同行支店(現住)東 京府下大井町字水神下二〇六四、
●森田軍治君(六) 岡崎市立商業學校(就職)
●村上 輝正君(一六) 姫路歩兵第十聯隊入營中 の處滿期退營住所從前通り
●室賀 國威君(二三) 轉居・武庫郡本山村字野 崎六五五、(甲南女學校前)
●榎本 政一君(一七) 香川縣倉敷紡績會社勤務 の處岡山縣倉敷町同社調度課(轉勤現住岡山縣倉敷町 東町吉井旅館内)

○の部

●中西 博君(一七) 轉居・大阪府下東成郡小 路村字腹見東ノ小路
●根岸 正一君(五) 小樽高商勤務の處新設高 松高等商業學校(轉任、現住高松市南新屋町三七、 目黒三九二、
●二宮 俊二君(一五) 轉居・東京市外目黒字下 目黒三九二、
●小川實三郎君(六) 武庫郡本山村野崎六〇 六、(東海道線住吉驛より東へ十分許り甲南女學校西) (轉居)
●小山甚一郎君(一一) 三菱商事株式會社浦鹽出 張所勤務の處東京市丸ノ内同社雜貨部(轉勤、(住所) 東京府下千駄ヶ谷八五六、木村榮方
●大野 弘男君(七) 廣島大阪合同紡績會社辭 職、武庫郡蘆屋濱蘆屋に現住
●大塚 靜君(七) 福岡縣安川松木商會勤務 の處門司市西本町同商會門司支店(轉勤)
●大塚 保君(一六) 岡山歩兵第五十四聯隊へ 入營中の處滿期退營從前通り神戸橫濱正金銀行神戸支 店(復職)
●大橋 英治君(一一) 山下姓に復籍、住ノ二を 山口縣倉敷郡名田島六二、に變更
●岡田 順次君(商大卒) 東京市麹町區永樂町二 丁目一、大川田中事務所内沿海州木材株式會社(就職 (住所)東京市本郷區森川町一、有絡館)
●岡本 俊雄君(九) 三井物産孟買支店勤務の 處大阪府東區高麗橋二丁目同社大阪金物部(轉勤)
●岡本勝太郎君(一一) 轉居・武庫郡本山村北畑 (飯急岡本勝保久其神社東一丁)

Sの部

●三田 次郎君(一六) 姫路歩兵第三十九聯隊へ 入營中の處滿期退營大阪府東區高麗橋四丁目東京海上 火災保險會社(復職、(現住)神戸市上筒井通七丁目五 七、(市電熊内二丁目停留所上右側三軒目)
●佐藤 卓君(一三) 東京市麻布區榮町一八 〇(轉居)
●佐藤 秀夫君(一六) 大阪川北電氣企業會社辭 職、大阪府東區大川町(淀屋橋停留所西半丁)岩田商店 (就職、電話本局一八六〇一八六一)
●佐藤 浩君(一三) 岡東改姓・拜啓益々御 清祥奉賀候陳者小生儀今般岡東家に入籍致候就ては不 相變御高説賜り度右御披露迄如斯御座候(轉居東京市 麻布區本村町二六、(仙臺阪上)
●佐野 周君(一一) 東京市丸ノ内報知新聞社 就職
●榊原 元一君(八) 東京市株式會社日本信託 銀行東京支店勤務の處大阪府東區今橋二丁目一番地同 行本店(轉勤、(住所)武庫郡精道村三條字西其手二五、 (郵便物其他通稱、蘆屋三條)の方判りよし)
●澤村 彌君(一五) 京都市住友銀行京都支店 勤務の處大阪府南區内安堂寺町通三丁目同行上町支店 (轉勤大阪府南區内郡道明寺村字澤田(轉居)

Nの部

●永井幸太郎君(三) 武庫郡精道村三條字西其 手一四一、(飯急電車蘆屋川電車線山路側の道路を西へ 約十分間)
●永井 清一君(一六) 小倉歩兵第十四聯隊へ入 營中の處退營門司市本町住友銀行門司支店(復職)

●瀬戸 直一君(六) 大阪府西成郡玉出町南浦 四八九ノ四に轉居(住ノ二)姫路市五軒邸七四、
●清水 一良君(一七) 朝鮮平壤府柳町一、平 壤電氣株式會社(就職、朝鮮平壤府港町九七、河野益 一方(轉居)
●志知 藤助君(一七) 轉居・武庫郡御影町但馬 口綱谷伊右衛門方
●柴田三四治君(商大卒) 商大在學中の處卒業、 大阪府東區高麗橋二丁目三井銀行大阪支店(就職、(自 宅)神戸市須磨東口
●杉本 恭一君(一六) 徳島歩兵第六十二聯隊へ 入營中の處滿期退營從前通り大阪江商株式會社(復職)

Tの部

●田中 一郎君(一五) 甲種勤務演習の爲四箇月 間姫路歩兵第三十九聯隊機關銃隊見習主計として入營
●田中 四郎君(一六) 姫路歩兵第三十九聯隊入 營中の處退營從前通り神戸鈴木商店(復職現住從前通 り)
●田畑 隆雄君(一六) 大阪大日本紡績株式會社 倉庫係として勤務の處原料課(轉課)
●田峯 眞一君(三) 神戸市京町八〇番二十八 號室に於て田峯事務所開設(電話三宮三九〇四番)
●多次喜太治君(三) 大阪瓦斯會社岩崎工場幹 職大阪府西成郡中津町光立寺四四一、に於て大阪寒 梅製粉所自營

高淵 芳郎君(一五) 轉居・神戸市西須磨中稻 荷二〇ノ二、

●高橋 武美君(七) 一月二十二日付農商務省 書記官食糧局調査課長に轉任
●高島 吉枝君(一七) 宇都宮歩兵第五十九聯隊 (入營中の處退營、(現住)宇都宮市曲師町六、
●竹中 政一君(一) 滿鐵奉天地方事務所勤務 の處北京城内滿鐵公所(轉勤)
●竹内準之助君(六) 東京丸ノ内山下汽船續業 會社勤務の處名古屋市中區小島町七八、同社(轉勤、 名古屋市中區千種町元古井六八、に轉居(電話東二六 五六)
●竹内 象藏君(一〇) 轉居・神奈川縣鎌倉町千 度小路一九二、(電話四一三番)新年號動靜欄勤務先中 「丸ノ内ビルディング」とあるは「丸ノ内郵船ビルテイ ング」の誤り
●反田 喜平君(一一) 報告洩れ、小倉市大阪町 八丁目一〇八、日本電線製造株式會社九州出張所(昨 年四月上旬轉勤(電話長七三〇))
●橘 頼二君(一六) 轉居・東京市小石川區駕 籠町五一、箕輪方
●富岡惠次郎君(一六) 轉居・武庫郡大社村森具 (西宮香櫛園池端山崎タキ方
●津田 武二君(一一) 轉居・神戸市西須磨中小 神九、
●津田 愉三君(一五) 校長秘書勤務の處宮崎縣 高鍋中學校(就職、(現住宮崎縣兒島郡高鍋町道具小 路藤田方

Wの部

●渡部 包武君(九) 神戸日本郵船株式會社勤 務の處大阪府西區川口町同社大阪支社(轉勤)
●渡邊 修三君(一一) 自營・神戸市裏町四〇ラ ッキー商舖はラッキー雜貨店と改稱(電話三宮四〇八 五番)神戸市榮町通六丁目六榮館に於て直輸出入政に 委託賣買業朝日商會開店(電話元町三一六一)
●矢吹 敬一君(一) 東京丸ノ内橫濱正金銀行 東京支店勤務の處同行スマラン支店(轉勤アドレス左 の通)
c/o Yokohama Specie Bank Ltd., Semarang Jova.
●八木 敏君(一〇) 轉居・京都市上京區粟田 口三條坊四〇(轉居(電話中二九四一番)

Yの部

●八木 敏君(一〇) 轉居・京都市上京區粟田 口三條坊四〇(轉居(電話中二九四一番)

●山上 松藏君(一七) 辭職、自營、神戸株式會社大澤商會辭職、東京市深川區木場町一六に於て製材業自營、東京市北豐島郡高田町大字雜司ヶ谷旭田四三二に轉居

●山下 俊吉君(一一) 轉勤、新設京都市烏丸通二條上ル八千代生命保險株式會社京都支店に轉勤電話上九三二、自宅京都府宇治郡山科村日岡、閑齋園内電話上二七四二番(閑齋園呼出)

●山口 貞一君(二五) 京大經濟學部在學中の處卒業京都市烏丸通三條通角第一銀行京都支店へ就職、(現住)上京區淨土寺馬場町小林太一郎方

●安井 警三君(五) 轉居、東京府上下大崎五四七、

●横山義之助君(二三) 轉居、武庫郡御影町宇平野一五八七、電話御影一〇四三番(阪急電車御影停留所西三丁電車線路下二丁)

●吉田 長祥君(四) 住所變更並に絹織工場買入、別邸を住宅に變更、電話を長距離に加入從來の現住所は營業所を構設してその中に包含、石川縣鹿島郡御幸林字串(北陸線粟津驛より十五丁)に絹織工場を買入當分月の内半分位出張

●吉田 秀太郎君(八) 帝都復興院物資供給局勤務の處今回官制變更の結果復興局經理部となり引續き勤務

●吉村 佐二君(一六) 勤務先十五銀行人形町支店に東京市京橋區南傳馬町二丁目一八に移轉(株式會社十五銀行通三丁目支店)

●吉村喜三郎君(一七) 勤務先大阪神谷商會社大阪支店は大阪商業會社と改稱

●特別會員動靜

●吾孫子 勝君 東京市本郷區曙町一五ろ三號に轉居

●長本 英夫君 長崎市片瀨町二丁目四七ノ一五に轉居

●北村 五郎君 c/o Yamashita & Co., (London) Ltd., 12 Great Saint Helens London, E. C. 3.

●田中 金司君 c/o The Japanese Consulate General 165 Broadway, New York City N. Y. U. S. A.

私は愈々アメリカカンに腰を卸すことに相成りました。日本もそろそろ春めいて参つたことでせう當地はまだく／＼なか／＼寒い昨日などは降雪一尺にも及んだ位です小生の通學してゐるハーバート大學の附近は景色もよし歴史的思考も多い地方に住むには結構な所です。(十三年三月十四日)

●居所不明會員

左記諸君轉居先不明に付御存知の方は御手数ながら御通知願ひます。

- 河本 市郎君(一) 市田幸四郎君(一)
- 隈本 佐一君(一) 藤崎 丈松君(二)
- 直井 鐵也君(二) 小見山鐵太郎君(三)
- 宇多 徹雄君(四) 渡邊 嘉二君(四)
- 古藏 利吉君(六) 川島 精三君(七)
- 中川 雄治君(六) 矢内敏治郎君(七)
- 重兼 宗一君(八) 河野 停一君(一〇)
- 橋本 千一君(一一) 吉井與三郎君(一二)
- 岸本 秀吉君(一二) 奥村 良一君(一三)
- 東 久雄君(一五) 岩田 三郎君(一六)

●訃

左記會員は有爲の材を抱き逝去せらるる謹みて哀悼の意を表す。

●東 輝雄君(二) 東京に於て大正十三年一月二十二日逝去

葬儀は三月二十二日日本籍地熊本に於て舉行九州支部を代表して幹事出光佐三氏参列せられたる由

遺族 武庫郡糟道村山蘆屋吉山愛一氏方 東 輝雄

●浅井徳太郎君(二五) 武庫郡西宮に於て大正十三年三月十一日逝去

葬儀は三月二十一日西宮馬場町西蓮寺に於て執行せらる。

遺族 武庫郡西宮町字川尻 浅井 ヤエ

●濱田 隆三君(三) 兵庫縣三原郡に於て大正十三年三月二十一日逝去

遺族 兵庫縣三原郡松帆村菅飯野五五 濱田 瑞子

●名簿誤謬訂正

●阪本 徳次君(七) アドレス中 Maritime であるは Maritime Building の誤り。

●青柳 辰雄君(一〇) 三月號動靜中居所不明とあるは誤り(現住)東京府下大久保百人町五六、

●秋葉 四郎君(四) 三月號動靜中轉居先「東須磨西寺四四」とあるは「東須磨西寺田、四」の誤り

●竹原 竹藏君(二七) 勤務先中「南東街」とあるは「南投街」の誤り

LUCKY STORE

の高尙な春向品を御用ひの方は心まで爽快になります

直輸入販賣 男子用 洋雜貨 婦人小供洋服下着 附屬品 庭球用品

神戸市元居留地四〇(三宮神社前西) 電話三宮四〇八五 ラッキー雜貨店

轉居御通知申上候。

神戸市、西須磨、中小神、九番地。

(但別荘學校裏門筋山手) 津田 武二

大阪市東區備後町二丁目大阪野村銀行内 野村葦合同人會

- 中山良一 平岡武雄 藤井萬三郎
- 前田梅松 半田清 大浦義雄
- 伊藤千三 富成宮吉 池田義秋
- 川端丁 吉田茂太郎 伊藤景藏
- 小林徳三郎 兼清福松 西山磯一

吾々は皆愉快に働いて居ます。いつも御無沙汰して済みませぬ。誌上で御挨拶致します。

母校昇格記念會

時代の要求が吾等に叫びはじめた商大問題が幾度か
 慮げられ、臥薪嘗膽五箇年に渡る長年月を経て大正十
 二年三月二十三日第四十六議會の最終日に於て目的の
 達成を見向問題は多少残るも一先光榮の終結をつ
 げ母校の歴史を飾り得たることは同窓一同喜を同ふす
 る處であるが直接其の衝に當つて奔走した吾々にまつ
 ては一入の喜である何か催して此の喜を永く記念して
 はこの校長の御意向から種々協議を重ねた結果元實行
 委員の有志が一堂に會合して懷舊談に一夕を過すこと
 となり會費參圓也で案の通過をした前日二十二日午後
 六時から市内京町八〇東陽軒に於て記念會を催した竹
 田、福島の兩氏時間飛行以下刻々に來場控室は煙草の
 煙渦を巻き折り柄の選舉談に花を咲す、午後七時校長
 を中心に卓を圍み着席食堂を開く、酒にメートル、洋食
 に腹、和氣は次第に室に満ち各自取込みに多忙、テサー
 トコースに入るや竹田氏本日記念會を催したることに
 就て一場の挨拶あり續いて校長、阪西、小川の兩教授交
 々當時の懷舊談あり次に田中守一氏商大問題が一時擱
 り濱の悲運に遇ひ上京中當時の衆議院議員上塚氏によ
 り甚大なる便宜を得たることに就て述べられ尙ほ今回武
 庫郡より第一回の前田房之助氏、神戸市より第六回の
 藤原米造氏衆議院議員立候補せられたるにより同窓諸
 兄の深甚なる御同情を乞ふと述べられたるに對し、前田、
 藤原の兩君相次ぎ衆議院議員立候補せられたる挨拶あり、
 小山、福島、瀬戸の三氏兩君の爲め同窓諸兄の奮
 起を希望された、午後十時三十分竹田氏の發聲により

母校及び校長、同窓會の高歳を三唱して散會した。
 本日出席者次の通り(次第不同)

- 水島校長 阪西教授 丸谷教授
- 小川教授 岡田教授 生島廣治郎君
- 小山桂太郎君 田中守一君 杉田繁治君
- 林 真吉君 前田房之助君 前田 勇君
- 吉田 長祥君 竹田龍太郎君 福島 嘉平君
- 吉田 精三君 龜井英之助君 瀬戸 時友君
- 岡崎 康一君 藤原 米造君 川原 慶一君
- 窪田 書記

社團法人凌霜會

四月二十三日(水)明石町三三、明海ビル八階に於て
 午後六時より催されたる春期總會並に社團法人凌霜會
 創立總會は各期を通じて多數の會員出席に及び非常な
 盛會であつた、今回の議案、會計會報の報告並に社團
 法人凌霜會設立と同時に解散の件は竹田龍太郎氏報告
 し且つ満場之を諍りたるに一同異議なく承認せり。
 引續き社團法人凌霜會創立總會に移り竹田氏の指名
 により永井幸太郎氏座長となり議事に入り定款の承認
 評議員選任、其の他創立に必要な一切の要件に付き
 出席會員一同に諍りたる處満場一致異議なく總て原案
 通り可決す。(詳細後報)

會費受領報告

(自大正十三年二月十六日
 至同 年四月十七日)

- 一金六拾參圓 九一十一年度及終身會費 濱田 林藏
- 一金五拾五圓 十一年度及終身會費 藤原恒三郎
- 一金五拾貳圓 同上 山田 嘉久
- 一金貳拾參圓 八十二年度分 白井 長三
- 一金貳拾圓 十三年度分 東 義一
- 一金拾八圓宛 九十二年度分 山口 輝一
- 中山正三郎 濱田 信哉 青柳 長雄
- 若林敏次郎 加藤 敏清 三浦次三郎
- 渡邊 保 藤澤 道孝 山元 榮藏
- 刀根 文雄 高幣 萬藏 代喜 純孝
- 大澤 忠藏 桑山 拓治 角田 一雄
- 一井 保造 可部 清一 淺井 彌六
- 射延 一郎 牧野 廣吉 岡本 重夫
- 平井 秀雄 伊藤吉之助 野原 嘉一
- 田中 喜八 楠木郁之助 磯田 早苗
- 前田 梅松 田中 一 川島 登
- 岩下 房人 今井 明 早川 登
- 山川 宏 吉本覺太郎 瀨上 昌一
- 増尾 辰政 宮園 達三 小林 吟二
- 正田 林次 古澤 常次 中卷 弘
- 湯川 貞男 東條 市助 松波 正明
- 森田 達 服部 清彌 長谷川 彰
- 加納 茂 安田 幸吉 四元 宏
- 門間 堅一 中西 三郎 勝浦 圭
- 入江 軍兒 辻 晋次郎 小松 美幸
- 中谷 一雄 藤原 義雄 關 寛平
- 近藤 利文 河瀬 直忠 田原 正男
- 岡村 省三 田川 武男 木村 彌藏

松島 安	中村 稅	青盛 爲二
淵上 孝雄	北濱 一郎	桑原 芳雄
小倉 正勝	後藤 周一	大浦 義雄
淺井 徳太郎	吉田 謙三	中村 彌六
野村 英太郎	吉村 謙三	小原 又作
狹野 拙夫	十三年度分	大橋 義勝
日下 雅太郎	中野 利恭	矢内 信太郎
一金拾圓宛	八十年年度分	林 英男
一金七圓五拾錢	十一年十二年度分	小出 憲
一金八圓	同上	川野 清隆
一金六圓	同上	山口 爲三郎
一金七圓五拾錢	同上	寺田 空太

○商大問題醜金受領
報告 (自大正十三年二月十六日
至同年四月十七日)

一金百圓	五口第三、四回分	大石 直次良
一金八拾四圓	一口分	大西 保夫
一金七拾圓	一口第四、十回分	刀根 文雄
一金五拾圓	一口第五、九回分	木谷 豊
一金四拾圓	一口第七、十回分	萩野 拙夫
一金四拾圓	一口第六、九回分	三浦 次三郎
一金參拾圓	三口第五回分	三宅 馴六
一金貳拾圓宛	一口第九、十回分	谷口 精一郎
大野 弘男	篠崎 露二	
鬼頭 平太郎	濱田 稔	
一金貳拾圓宛	一口第一、二回分	今井 道朗
池田 順一	衣笠 豊太郎	今宮 秀雄
平井 豊一	深見 嘉三郎	久保 三郎
服部 清彌	加納 茂	内藤 龜一
加藤 由次郎	田原 正男	
江村 剛一	田中 正雄	石田 猛夫
一金貳拾圓	一口第四、五回分	西本 蒼
一金貳拾圓	一口第七、八回分	中谷 茂
一金貳拾圓	一口第五、六回分	

一金貳拾圓	一口第三、四回分	長澤 周一郎
一金貳拾圓	二口第十回分	中村 喜一郎
一金拾圓宛	一口第十回分	前田 政次郎
前田 政次郎	丹治 富三郎	田村 文雄
藤枝 善四郎	武岡 忠夫	園田 正治
植田 岩太郎	角谷 篤三郎	納賀 雅友
日下 雅太郎		
一金拾圓宛	一口第九回分	市川 忍
船渡 貞七	寺島 重	
井上 貞造	岡田 重朗	岡 長
和田 信純	川口 武夫	川端 眞之助
柏木 恒	水谷 芳介	植田 俊一
藤田 廣馬	澤村 福太郎	尖戸 榮二
小津 新一	小倉 安	鷺尾 正保
金平 淡之助	吉岡 諒一	山口 可一
牛神 猛郎	梅本 榮一	近藤 正
松岡 文雄	松田 繁太郎	飯田 省吾
吉野 光四	石香 裕晴	田中 均
和井 田太郎	堀戸 兵次	上田 義良
内田 隆雄	野村 邦之助	桑原 千秋
久保田 三三	山風 喜一	小川 理平
増田 憲夫	眞鍋 利一	田和 淳二郎
田尾 本政一	徳弘 敬之助	谷 順吉
吉村 佐二	黒田 富二	堤 壽一
萩田 健治	岩永 季昌	山田 嘉久
石井 源一	藤井 喜助	
橋 頼二	上原 一三	
伊勢 谷良吉	射延 一郎	今田 益三
林 好入	林 正治	岡本 憲司
川添 繁郎	吉村 喜三郎	田中 傳造
中西 博	中山 静一	村井 眞吾
野原 嘉一	久米 川俊	牧野 廣吉
横本 政一	不破 直之	榊原 零一
志智 政助	平野 泰藏	廣海 昌藏
中山 明治	石光 憲	泉 丈太郎
伊豆田 忠彌	牲川 悦三	西田 成則

次號 發行 原稿締切 五月十五日
發行 行 五月二十五日

大正十三年四月二十七日印刷
大正十三年四月二十八日發行
兵庫縣西灘村森三十番地
編輯兼發行人 窪田 安次郎
印刷人 辻 左武郎
發行所 神戸高等商業學校學友會

大内 恭行	柏原 敏行	勝田 久平
川西 淺次郎	谷口 元信	田尻 久平
水田 善	中島 武四郎	中西 利平
矢野 雄俊	山田 信藏	眞杉 孝三郎
足立 利器	赤根 道之助	佐々木 真宗
鎌倉 重雄	久富 保造	菱田 貞太郎
池田 俊保	大林 敬夫	梶山 茂生
高橋 眞男	勝田 友彦	吉田 利造
柳瀬 眞男	上田 秀造	矢野 林茂
齋藤 眞男	兒玉 利武	遠藤 正五郎
島 長一郎	柴原 弘	湯川 眞男
長谷川 彰	岡田 新三	入江 軍兒
新庄 松三郎	稻垣 忠三	村上 保三
堀 弘	谷口 義則	土持 綱世
山上 松藏	山本 央治	細川 喜代造
近藤 利文	國本 幸一	山下 虎一
松井 通雄	清水 一民	江口 愛夫
近藤 尚	森川 敏雄	岸本 善一
小林 隆三	川崎 敏雄	土居 榮介
松本 眞雄	和氣 傳	森平 篤二
藤井 正雄		
財前 正人	佐川 春夫	松本 一郎
水井 清一	前野 不二男	豊田 右伯
一金拾圓宛	一口第七回分	小野 芳昌
一金拾圓宛	一口第三回分	
一金拾圓宛	一口第三、四回分	

編纂餘言

この會報を古い友、新しい友達の前に捧げ得ることをよろこぶ。委員が未だ決定してゐなかつたので、萬事を自分ひとりでしなければならなかつた。それで色々不備不満の手の多い事は許して戴きたい。

× 今月は原稿が殆んど無いと云つてもよい位であつた。これではどうも困ると思ふ。如何に編纂子が腕に燃をかけたからと云つてもよい原稿が無ければ所謂のれんど腕押しでお話にならない。どうか諸君の努力の作品に接したい。會報をより善く育て、行くのは我々丘人の誇らしい権利であると同時に又神聖なる義務でもある。編纂子の吐息をも察して多數の投稿を賜りたい。切に希望する。

× 近頃會報の内容が多少断片的になつたことを感ずるのは、あながち自分一人ではあるまいと思ふ。この傾向は實に寒心すべきことであると思ふ。原因一つに懸つて編纂子の無能にあると云ふも、多少は分つて諸君の共に負ふべきであらう。研究欄、想華欄に讀みごたへのある内容を盛りたいものである。

× 丘のはつ夏は多事である。ボートの練習も始まつた。陸上運動會も舉行される。グラウンドには憂然たるボールの響がある。海へ行け、裸で走れ、眞黒い顔になれ、丘人は皆健康の保持者でなければならぬ。世のすべての事は健康を前提として始めて意義を持つのである。

× 次號は例によつて記念祭號として、五

月の中旬に發行したいと思つてゐる。記念祭に際しての感想、希望等の投稿を歓迎する。なを締切日は別項記載の通り御承知ありたい。

- × お願いの件
- 一、投稿はなるべく消費組合の二十四字詰十行の大形原稿用紙を使用して下さい。小形のものや紙片に書かれたものは紛失の恐がある。
 - 二、本三の商研だよりをどしどし寄來して欲しい。
 - 三、部報は簡単に明瞭に願ひたい。それからなるべく早い時機の中に寄來して貰ひたい。あまり時機がすぎると讀む人も書く人も興味が失せるやうなことがあると不可ない。(勇二)



大正十三年五月二十八日發行 第七十七號

学友会報

神戸高等商業學校學友會